

ECOLE J. NAKAMURA ARCHITECT D. P. L. C.  
CHIEF MANAGER ARCHITECT TAKEO AMITO  
DRAWING & COLORING ARCHITECT YUICHI MATSUMOTO  
LAYOUT & CAD HARUO OHNISHI

いとしい御胸よ、もしあなたが  
勝者について語りたいのなら  
真っ昼間に虚空を渡る、  
日輪よりも白熱した星を探してはならぬ。  
オリンピックにまさる競技会、  
そんなことを語ろうなどと  
思わぬことだ。

# 古代オリンピアの復元

監修／樺山紘一 青柳正規  
復元／大林組プロジェクトチーム



Yuichi Matsumoto



## 一、はじめに

今日、われわれが「スポーツの祭典」と呼び、四年に一度開催する国際的な一大イベントであるオリンピック。近代におけるその始まりは、一八九六年にクーベルタン男爵の提唱によって開催された「近代オリンピック」だが、さらに歴史を遡ってその原像を訪ねると、遙か三〇〇〇年の昔に古代ギリシアの地で行なわれた「オリンピア祭」へと辿り着くことができる。では古代ギリシア人を熱狂させたというオリンピア祭とは、どんな祭典だったのであろうか。この問いに少しでも正確な答えを用意しようと思えば、百万言を費やしてもなお足りないかもしれない。なぜならオリンピア祭は、古代ギリシア人にとっての宗教、神話、哲学、民俗、教育あるいは闘争心や崇敬といった精神的基盤、つまり広い意味での世界観そのものと深く関わっているからである。

そこでわれわれは多くの説明に代えて、初めにただ一つのエピソードを紹介しようと思う。それは、歴史の父ヘロドトスの著書の中にある。ヘロドトスは、その大作『歴史』の最初の一篇を、オリンピアの地で発表したという。この伝説が、すでにオリンピアの何事かを伝えているが、ここで紹介するのは『歴史』の中のわずかな数行に過ぎない。

『歴史』は、よく知られたようにギリシアとペルシアとの戦いを中心とした歴史書である。紀元前四

八〇年頃に始まる第二次ペルシア戦争では、侵攻してくる圧倒的に優勢なペルシア軍を相手に、アテナ（アテナイ）やスパルタを始めとしたギリシアの都市国家（ポリス）が各地で激戦を繰り広げた。その一つテルモピュライの戦いは、スパルタ王レオニダス率いるギリシアの精鋭部隊が、ペルシア軍の前に孤軍奮闘したあげく全滅したことで知られている。戦いの後、勝利に酔うペルシア軍の陣地に、ギリシア軍を脱走したアルカディア人が引き出されてきた。そこでペルシア軍の将校が脱走兵に向かって「いまギリシア軍は何をしているのか」と尋ねたところ、「オリンピア祭を祝っているところで、競技会を開いている」と答えた。意外に思ったペルシア軍の将校が、「その競技会に勝つと、どんな賞品がもらえるのか」とさらに尋ねると、「オリイブの冠が与えられるだけだ」という答えが返ってきたのである。あまりのことに驚愕したペルシア軍の将校は、ギリシアへの侵攻作戦を提言した自軍のマルドニオスに向かって、こう叫んだ。

「ああマルドニオスよ、そなたはわれらをよりにもよって、何たる人間と戦わせようとしてくれたのか。金品ならぬ榮譽を賭けて競技を行なう人間とは。」（松平千秋・訳、岩波文庫）

このエピソードの中で、ギリシア人が戦いのさな

かに祝っていたオリンピア祭こそ、のちにわれわれがオリンピックと呼ぶ競技会の原像であった。テルモピュライの戦いでスパルタ王レオニダスの軍が敗れたのは、ちょうどスパルタのカルネイア祭と、それに続く汎ギリシアの一大祭典であったオリンピア祭が開かれていて、援軍が送られなかったためといわれている。なぜならカルネイア祭の期間は出征が禁じられており、またオリンピア祭の期間はギリシアでは「聖なる休戦」が結ばれ、すべての敵対行為が禁じられていたからである。

聖なる休戦は、ギリシアの都市国家の間で成立した条約でしかなかったが、古代ギリシア人はペルシア軍の侵攻によって祖国が減じる危機に瀕している時、祭りの精神を遵守し、ギリシア中から遠いオリンピアの地に集い、榮譽を賭けた競技会を開いたのである。



## 二、オリンピア——祭典の起源と地理

### ◎オリンピア祭典競技の起源

オリンピア祭とは、そもそも何だったのだろうか。建築面から復元にアプローチするわれわれにとっても、祭典の歴史と意味は、大いに関係がある。そこでまずオリンピア祭の起源について、簡単に触れておきたい。

紀元前五世紀の叙情詩人ピンダロスは、オリンピア祭の競技の起源に関する二つの詩篇を書き残している。その一つはペロプスとオイノマオスによる戦車競走である。オリンピアのあるエリス地方のピサ王オイノマオスは、婿によって死がもたらされるといふ予言を受けていた。そこで娘のヒッポダメアとの結婚を申し出る若者に、自分との戦車競走に勝つことを条件として課した。オイノマオスはとりわけ優れた馬を持っていたため、十三人の若者が次々と挑戦したが敗れ去り、逆に彼の手に掛かって殺されてしまった。この噂を伝え聞いた小アジア出身のペロプスは、海神ポセイドンに祈願して黄金の戦車と駿馬を与えられ、ついにオイノマオスとの競走に勝ってヒッポダメアを手に入れた。オイノマオスは予言通り、競走の最中に戦車が転覆して死んでしまう。このペロプスとオイノマオスの戦車競走がきっかけとなり、オリンピアの祭典競技が始まった、というものである。

もう一つは、英雄ヘラクレスにまつわる伝説である。ヘラクレスはデルフォイの巫女から、十二の功業を成し遂げる代わりに不死の身を与えられる約束を得た。その十二の困難な仕事の一つが、エリス地方のエペイオイ王アウゲアスの牛小屋掃除であった。



ゼウス神殿正面破風浮き彫り／オリンピア考古美術館

アウゲアスは掃除の見返りとして報酬を与えることを約束したが、それを守らなかった。そこでヘラクレスは兵を率いて、アウゲアス一族を攻め、ついに滅ぼしてしまふ。その勝利を祝って開いた競技会が、オリンピアの祭典競技の始まりであったという。

この二つの伝説の共通点は、オイノマオスやアウゲアスの死を通して競技会が開催されることである。そこでオリンピア祭の起源を、葬祭競技であったとする説がある。例えばホメロスはその著『イリアス』の中で、トロイア戦争で死んだ戦友パトロクロスの榮譽を称えて、アキレウスが開催した葬祭競技の様子を歌っている。古代ギリシアでは、そうした競技会が早くから開かれていたものと思われる。

こうした伝説に対して、より歴史的な起源を解く鍵もある。それは「イフィトスの円盤」と、ヒッピアスによるオリンピア競技の優勝者リストの存在である。紀元前八世紀のエリスの人イフィトスは、当時ギリシアの都市国家の間で戦乱が絶えず、また伝染病の蔓延により人々が疲弊しているのを見て、休戦協定の締結を提案した。その休戦の内容を記した円盤が、オリンピアのヘラ神殿に長く保管されていた。またのちに、紀元前五世紀のエリスの学者ヒッピアスは、伝承などを基に紀元前七七六年に開催された競技会を第一回とする、古代オリンピックの優勝者名のリストを作成した。この二つの史実を合わせると、イフィトスによってオリンピア祭の休戦が保障され、第一回オリンピア祭が開催されたという解釈が成り立つのである。しかもこの紀元前七七六年は、ギリシアの歴史ではっきりとその年数が記された最古の年であるという。

けれども紀元前七七六年に開催された第一回オリンピックは、再開されたオリンピア祭であり、実はもつと以前から「古、古代オリンピック」というべき競技会が存在したとする見解も昔からある。ホメロス自身はオリンピア祭とはいっていないが、『イリアス』や『オデュッセイア』の中でしばしば歌っているような競技会こそ、太古のオリンピックの姿であったともいう。

その歴史的検証は置くとしても、紀元前七七六年に始まる古代オリンピックは、その後実に一二〇〇年近くも継続した。われわれの知る近代オリンピックが、まだわずか一〇〇年に過ぎないことを思うと、驚異ともいえる歴史を有しているのである。

## ◎オリンピアの地理的考察

地中海の東方、エーゲ海とイオニア海に挟まれたペロポネソス半島の一帯は、紀元前二〇〇〇年の太古から文明の栄えた地として知られている。その半島の西のはずれ、エリス地方の一角に、オリンピアの遺跡はある。アテネやエーゲ海を中心とした現代ギリシアの地理的視野からみると、オリンピアは辺境とも思える地にある。だがギリシア文明の最盛期には、イタリア半島南部やシシリー島など、イオニア海からアドリア海に至る西方一帯にまでギリシアの版図は広がっていた。と同時にオリンピアは、オリンポス十二神の主神ゼウスを祀る聖地として、ギリシアでもっとも有名な信仰の地でもあった。

オリンピアの聖地は、アルフエイオス川とクラデオス川の合流地点にあり、クロノスの丘の南麓に広がる平坦な地にある。その神域はアルテイス(聖苑)と呼ばれ、面積は約二万五〇〇〇平方メートルに及ぶ。紀元二世紀、オリンピアを訪れた歴史家パウサニアスは、その著『ギリシア案内記』において、この地が水量豊かな川に恵まれ、川と泉の精にまつわる恋物語の伝説があったことを記している。さらにパウサニアスは、オリンピア祭に関わる数々の神話や伝説を紹介しながら、そこに築かれていたゼウス神殿を始めとした多くの建物や祭壇についても詳細に記述している。現代フランスの歴史家ポール・ヴェエヌが『ギリシア人は神話を信じたか』の中で指摘しているように、神話や伝説に関してはパウサニアスは文献学者の冷徹な態度で紹介しているかのようである。しかし、オリンピアの地理や、そこにあった神殿や祭壇などの建造物は、まさしく彼自身が見た紀元二世紀のオリンピアの姿であった。ローマ帝国の支配下にあつて、いささか観光地化はしていたが、ローマ皇帝までが参加した権威ある祭典の開

かれる場所だったのである。

二〇世紀末の現在、オリンピアの遺跡に立つと、わずかに残る建物の基壇や柱、そして崩れ落ちた多くの石材が、雑草の中で風雨にさらされている。周囲には大きな町もなく、辺鄙とも思える場所に遺跡だけが時間から取り残されたように、ただそこにあるばかりである。その光景は、われわれに「建物と場との関係」という常日頃考えているテーマを、改めて強烈に認識させるものであった。それだけに、『ギリシア案内記』は、建築的側面からオリンピアを復元しようとするわれわれにとって、生きた形でイメージをかきたてる恰好の資料でもあったのだ。

パウサニアスが記した豊かな水に恵まれた地オリンピアは、しかしまた、その水が大きな原因となって歴史の陰に消滅することになった。紀元四世紀に、ローマ皇帝の禁止令によってオリンピア祭は終焉を遂げたが、その後アルフエイオス川とクラデオス川が幾度となく洪水を起こし、さらに地震による被害も加わり、オリンピア自体が数メートルもの土砂の下に埋もれてしまったのである。そのオリンピアが再び注目を浴びたのは、一八〇〇年代に入ってからであった。一八二九年にフランスが一部の発掘を行った後、一八七五年からアーネスト・クルティウスを中心としたドイツ学術隊による本格的な発掘が開始された。ドイツ学術隊による発掘は、二つの世界大戦を挟んで戦後も継続され、現在もおこなわれている。この長期的な実りある発掘調査によって、オリンピアの往古の姿がほぼ判明したのである。

今回、われわれが復元作業にあたって基礎資料としたのも、こうしたドイツ学術隊による成果の一部と、近年まで発掘を指揮したアルフレッド・マルヴィッツによる復元図の数々であることをお断りしておきたい。



オリンピア遺跡 写真: W.P.S



古代ギリシアを中心とした地中海東部



### 三、オリンピアの歴史の変遷と、その復元

人が住み着いた小さな集落が、やがて都市国家（ポリス）へと成長を遂げていく。そのメタモルフォーゼ（変容）の様相は、当時のギリシア都市の特色であり、オウディウスの語る転身譚にも似て興味深い。その中でもオリンピアの地は、古い神祠を中心に、さまざまな建造物が少しずつ付け加えられ、住宅こそないものの、汎ギリシア的な祭祀都市ともいえる独自の空間を生み出してきた。とりわけ神々を祀る空間と、競技のための空間とが歴史的に微妙な関係を保ちつつ、都市規模へと発展するその特異なプロセスは、現代建築に携わる者からみて、きわめて新鮮なものであった。

そこでオリンピアの復元にあたり、歴史との関わりをふまえながら、その発展と変遷について検討を加えることとした。

#### ①紀元前二〇世紀〜七世紀頃 （草創期の施設Ⅱ配置図1参照）

オリンピアに人が定住を始めたのは、青銅器時代であったといわれる。紀元前二千年紀後半のミケーネ時代になると、この地方の最初の王ペロプス（ペロポネソス半島の語源）の墓が、現在アルテイスと呼ばれる神域の中に置かれた。ペロプスは、前述したようにオリンピア祭の創始者といわれる人物である。その墓からは、戦車競技と関係があると思われる出土品も発見されている。また同じ時代にオリンピアという名称も生まれたといわれるが、それらが正確にいつのことであったかは判明していない。いずれにせよペロプスの墓の存在によって、オリンピアは信仰の地となり、施設造営が始まったとい

つていいだろう。ニコラオス・ヤルリウスが『古代オリンピック その競技と文化』の中で指摘しているように、オリンポスの主神ゼウス以前に聖なる英雄ペロプスへの崇拜が存在したことが、ギリシアにおいて競技と信仰とが一体となる背景であったという見方もできる。その後、アカイア人（南下したドリス人の第二波）がこの地に侵入し、紀元前一世紀頃に自らの主神ゼウスの祭壇を祀った。その祭壇は、パウサニアスによれば、犠牲（いけにえ）の大腿骨を焼いた灰でつくった塚であり、新には必ず白ポプラの木が使われたという。しかも驚いたことに、この祭壇は紀元四世紀にローマ皇帝テオドシウス一世によって撤去されるまで、ずっと灰でつくられ続け、高さ七メートル、底辺の周囲四〇メートルにまで巨大化していったのである。

またドイツ学術隊の発掘調査によれば、紀元前九世紀の遺跡として、炉の女神ヘステイアを祀る舟形神殿も発見されている。その場所はプリュタネイオンの側だが、オリンピア祭との関係ははっきりしない。こうした初期の神殿遺跡の存在も、この地の宗教的な歴史の深奥を感じさせてくれる。

そして紀元前七七六年、この地で第一回のオリンピア祭典競技が開催された。その時のスタディオン（競技場）は、ゼウスの大祭壇近くをゴールとして、神域の中に建設された。神への儀式と、競技との密接な関係をうかがわせる配置である。なぜならスタディオンはその後二度にわたり移築されているが、その過程はそのまま神域と競技施設との関係の推移を示していると思われるからである。そこでわれわれはスタディオンについて、その移築過程が分かる

ように図面に示すことにした。

#### ②紀元前七世紀〜六世紀 （形態にみる獨創性Ⅱ配置図2参照）

ギリシアの都市国家では民主政体が始まり、多くのギリシア人がイタリア半島などに植民都市を築き、勢力圏が広がった時代である。オリンピアはすでに汎ギリシア的な聖地として知られ、四年ごとに開かれるオリンピア祭は、ギリシア最大の競技会となった。競技日数は元来一日だけであったものが、二日から三日へと増加した。また競技種目も当初は短距離競走だけであったが、五種競技、レスリング、ボクシング、戦車競走などが加わった。さらに、古代オリンピックの一つの特徴である少年競技が行なわれるようになったのも、この時代であった。

施設面ではクロノスの丘の南麓沿いに第二期のスタディオンが、その南東側にはヒッポドロモス（競馬場）も建設された。

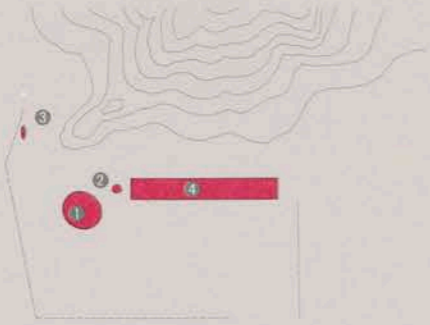
また紀元前七世紀から五世紀にかけて、クロノスの丘の南麓を削る形で、次々と宝庫群が建設されている。ギリシアにおける最古の神殿の一つといわれるヘラ神殿や、特異な形態をもつブレウテリオンなど、建築的にも興味を惹かれる建物が見られるのも、この時代である。その詳細については後述するが、この時代の建築は、初期ギリシア建築の獨創的な形態をよく継承しているといえる。

#### ③紀元前四三〇年頃 （華やかなりし時代Ⅱ配置図3参照）

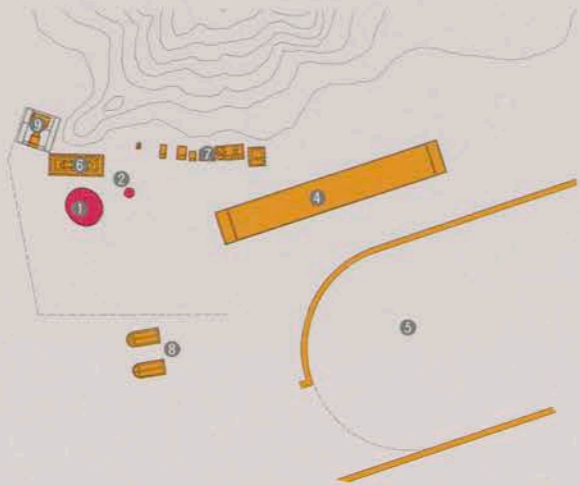
紀元前五世紀は、ギリシアの黄金時代であった。

オリンピアの変遷

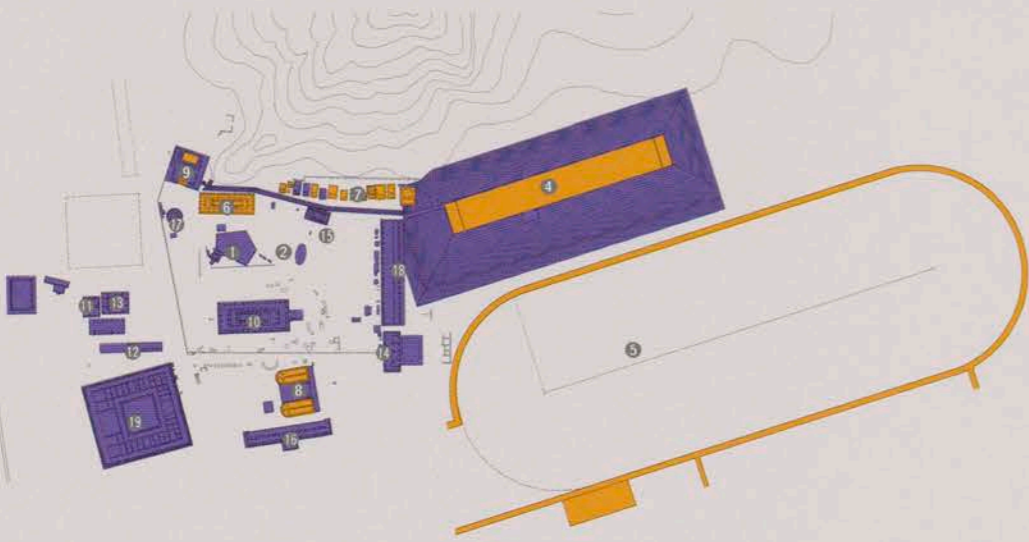
①紀元前7世紀以前  
（配置図1）



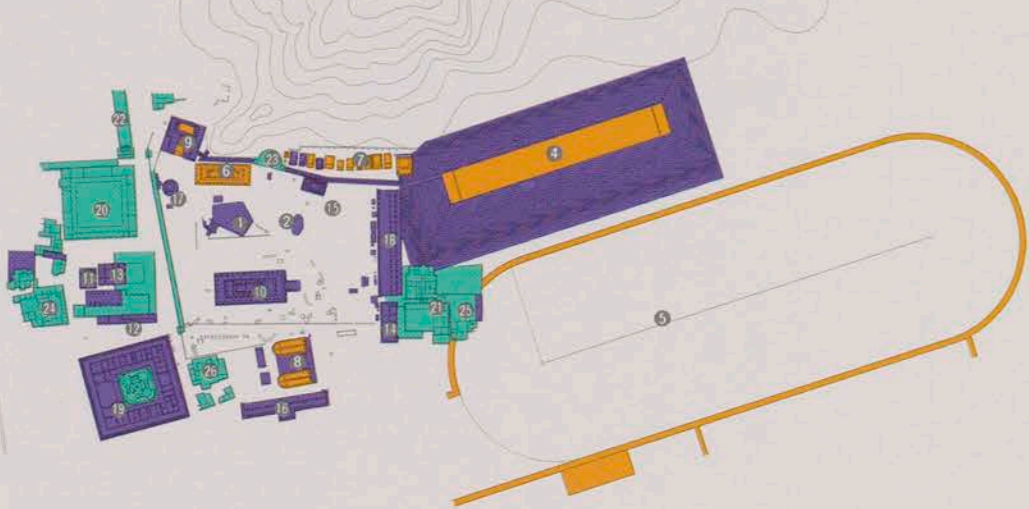
②紀元前6世紀頃  
（配置図2）



③紀元前430年頃  
（配置図3）



④紀元前1世紀頃  
（配置図4）



- ① ペロプスの祭壇
- ② ゼウス祭壇
- ③ 舟形神殿
- ④ スタディオン
- ⑤ ヒッポドロモス
- ⑥ ヘラ神殿
- ⑦ 宝庫群
- ⑧ ブレウテリオン
- ⑨ プリュタネイオン
- ⑩ ゼウス神殿
- ⑪ ヘローオン
- ⑫ フィディアスの工房
- ⑬ テオコレイオン
- ⑭ 南東会館
- ⑮ メトロオン
- ⑯ 南ホール
- ⑰ フィリペイオン
- ⑱ エコーホール
- ⑲ レオニダイオン
- ⑳ パライストラ
- ㉑ ギリシア住宅
- ㉒ ギムナシオン
- ㉓ ニュムバイオン
- ㉔ 宿泊施設
- ㉕ 東浴場
- ㉖ 南浴場

強大なペルシア軍との戦争に奇蹟的な勝利をおさめ、アテネではアクロポリスの復興が行なわれるなど、都市国家がそれぞれの繁栄を競い合った。それは一方で、都市国家間の確執を生み、戦争を誘引する結果ともなったが、同時に政治、経済、文化の各分野がその頂点に達した時期でもあった。ヘロドトスが『歴史』を語り、ピンダロスがオリンピック祭を始めとした競技会の優勝者を称え、ソクラテスが若者た



クロノスの丘 ゼウスの父の名を冠され、オリムピア神域を見おろす

ちに哲学を説いたのも、この時代であった。そうした中でオリムピアも最盛期を迎え、信仰の中心となる壮大なゼウス神殿が建設された。さらに、ギリシア芸術の巨匠と謳われた彫刻家フィディアスの手になる、金と象牙製の巨大なゼウス像が神殿内に安置されたのである。それは古代ギリシアにおける信仰の象徴といえるものであった。

二〇世紀初頭の哲学者ギルバート・マレーは、ギリシア宗教史を五段階に分類している(『ギリシア宗教発展の五段階』)。第一段階は、原始住民が不定数の神々を信仰した「原意味とした宗教段階」であり、第二段階はホメロスやヘシオドスらの文学による宗教改革を経て、紀元前六世紀以後のギリシアはオリムピア神の時代であったことを指摘している。その分類に従えば、紀元前五世紀はまさに宗教史の上からみても、ゼウスを主神とするオリムピア神の信仰が成熟し、ギリシア精神の最も高揚した時代でもある。その中でオリムピア祭そのものが、全ギリシアの平和的統一の象徴ともなっていた。

それだけにオリムピア祭は常に熱狂をもって迎えられ、競技種目も増え、全国から選手、コーチ、そして観客が押しかけた。スタディオンだけでも四万から五万人を収容できたというから、この地に集まった観客の数は想像もつかない。当時のオリムピアには一般の観客用の宿泊施設はなかっただけに、大会期間中は周辺一帯がさながらテント都市ともいべき景観を呈したことであろう。

そこでわれわれは今回、古代オリムピック精神がもっとも輝いたこの時期に復元の焦点を合わせ、信仰の象徴でもあるゼウス像が完成した紀元前四三〇年を中心とした、全盛期の聖地オリムピアの姿を次の第四章において再現することとした。

この時代の建築上の特徴は、まずスタディオンの位置が東に移動されて固定化し、やがて神域との間

にエコーホールが建設されたことである。また神域を囲む高さ二・五メートルほどの木製あるいは漆喰の塀が造られ、その内側だけがパウサニアスという真の意味でのアルテイス(聖苑)として区分された。これらによって聖と俗との分離、つまり神域と競技施設が目に見える形で厳然と区別されたのである。

④紀元前四世紀以降  
(競技者関連施設の充実(配置図4参照))

アテネとスパルタによるペロポネソス戦争を経て、ギリシア文明は少しずつ衰退を始める。オリムピア祭は、それでも施設の造営を含めて発展を続けるが、その一方でヘロドトスが描いたような高貴なオリムピック精神にも陰りがみえ始めた。紀元前三三八年にオリムピアの競技史上初めての買収行為が発覚したのは、その兆しであったかもしれない。競技選手職業化が進み、いわゆるアマチュア精神とは異質の要素が、競技会に入るようになってきたのが、この時代以降であった。

マケドニアによるギリシア統一、ローマの内乱とその後の帝国による支配。その混乱の時代も、オリムピアは盛衰を繰り返しながら祭典を持続している。皇帝ネロは、エコーホールの南に別荘を建て、自らも競技に参加したといわれる。しかしそれは、かつてギリシア人が名譽にかけて守ろうとしたフエアプラーの精神に基づくものでは、決してなかったようである。一方で皇帝ハドリアヌスは、ギリシア文化を愛し、オリムピアの復興にも力を注いだといわれる。パウサニアスのみたオリムピアは、その当時の姿であった。紀元後もオリムピアはギリシア・ローマ世界を代表する聖地であり、権威ある競技会の開催地としての有名性は保っていたのである。

しかし紀元四世紀になると、オリムピアはローマ皇帝によって異教の地と位置付けられ、祭典は禁止

された。紀元三九三年、第二九三回大会を最後に、古代オリムピックは一〇〇〇年を超える長い歴史に幕を降ろしたのである。

施設面からみたこの時代の特徴は、紀元前四世紀頃から競技者が優遇され、練習施設が充実したことである。クラテオス川と神域との間の空地に、ギムナシオンとパライストラが建設された。オリムピア祭に招聘された選手たちは、審判官の下、これらの施設で最後の一か月を練習と調整に励んだ。のちにオリムピア祭のない年にも、ここで十か月もの練習を積んだ選手もあり、それは選手の職業化を意味していたのである。

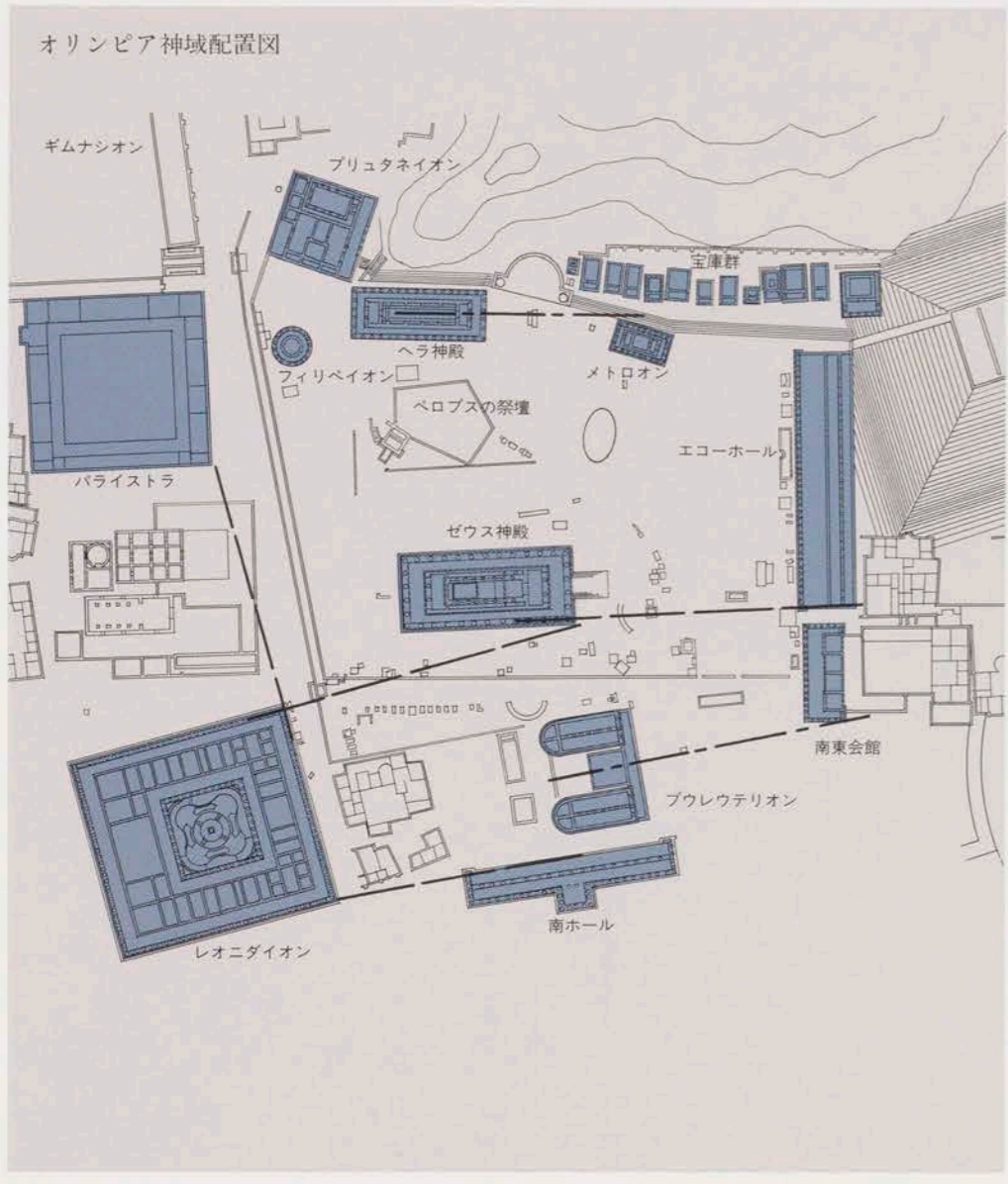
こうして施設造営の変遷を図面によって復元していく過程で、われわれは興味ある一つの試論と出会うことができた。それは熊本大学の伊藤重剛助教授によるもので、「一見無作為にみえるオリムピアの建物の配置が、実は意図的に行なわれたものである」という推論である。ギリシア最古の神殿といわれるヘラ神殿の建設から、ギムナシオンやパライストラの時代までをみても、数百年にわたり建設が続けられた。そのオリムピアの神域に、全体を律する規準が隠されていたのである。建築物の配置計画においては、紀元二世紀頃になると左右対称の軸線計画がみられるようになるが、それ以前のオリムピアにみられる軸線や外周線を意識した配置は、発展段階でも過渡期的な概念であると考えられている。その概要と略図については、別に示したとおりである。

アテネのアクロポリスでは、一見して無秩序にみえる建物配置の中に計画性が込められていることは周知のことだが、オリムピアにおいても配置の規準が存在した。こうした配置計画は、「もの」によって輪郭を限定する「空間意識」の高まりを示すものであり、古代ギリシアにおける建築水準の高さと考え方の一端を垣間見ることができ

オリムピアにおける建物配置の計画性  
(伊藤重剛氏、日本建築学会大会学術講演梗概集より)

(1) 建物外周の延長線と出隅との関係  
・エコーホールは、ゼウス神殿の南側柱廊の延長線上に、その南端を合わせて配置されている。  
同じ例が、レオニダイオンとパライストラとの間にもみられる。  
・既存の建物の出隅に新築の建物の外周の延長線を揃えた例として、レオニダイオンとゼウス神

殿、レオニダイオンと南ホールとの関係がある。以上のことから、ゼウス神殿を基準としてエコーホールとレオニダイオンが配置され、レオニダイオンを基準にパライストラと南ホールが建設されたものと思われる。  
(2) 建物の軸線と出隅との関係  
ブウレウテリオンの軸線は、南東会館の南東の隅にあたる。同じ例が、ヘラ神殿とメトロオンとの間にもみられる。



ゼウス神殿正面の想定復元図

ECOLE J. NAKAMURA ARCHITECT D. P. L. G.  
CHIEF MANAG'G ARCHITECT TAKEO AMITO  
DRAW'G & COLOR'G ARCHITECT YUICHI MATSUMOTO



Yuchi Matsumoto



ZEUS神殿の方位について

古代ギリシア神殿のほとんどは、その主正面、すなわち縦軸正面を東に向けて建てられている。Parthenon（パルテノン）では約13度、Zeusでは5度というように多少北に傾いている。こうした北寄りの傾きが示す傾度の差違はともかく、朝日が内陣深くさし込んだであろうとの推理は、Zeus神殿の場合、神像前面床面に設けられたオリーブ油池盤にさす朝日の反射光が、金箔の衣装をまとった神像を浮かび上がらせた、と言われる史実によって確かめられるかも知れない。

文献、資料、データを解析して、陽足が一年中で最も内陣の奥深くさし込む夏至（北半球6月22日頃）の、日の出から1時間後の午前6時頃を想定、朝日の方位、角度を決定して復元図を作成した。（網戸武夫）

YUICHI MATSUMOTO



## 四、オリンピアの復元

ギリシアの黄金期といわれる紀元前五世紀は、建築においてもアテネのパルテノン神殿を始めとして、みるべきものの多い時代である。とりわけオリンピアでは、その象徴となるゼウス神殿とゼウス像が完成し、その絶頂期を迎えた。

### ① 神殿建築

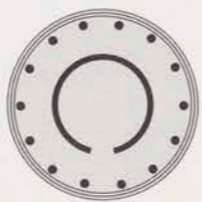
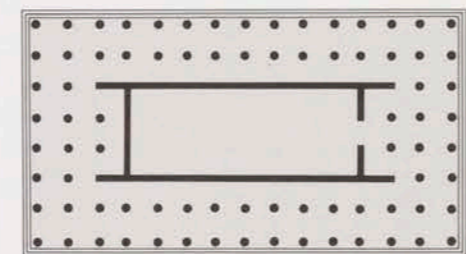
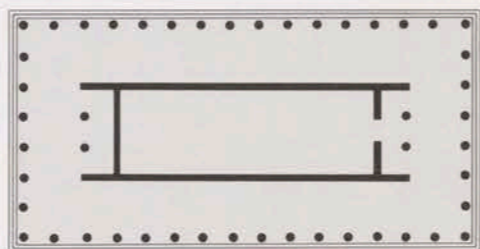
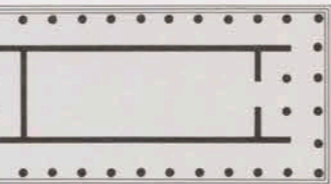
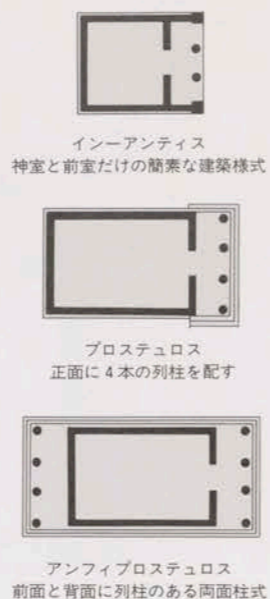
ギリシア建築の華といわれる神殿。その建築形態は、古代ギリシア人の造形思想をもっともよく表現している。明晰、冷厳、高貴、秩序、完結……などの言葉で形容されるその造形思想の背景には、「物の形をいつも明確に眼に捉え、その中に秩序と法則の支配する調和を感じとり、眼に見える対象を調和ある形態として意識にのぼらせ、あらゆる作品を宇宙秩序に参与する一つの対象として制作する」といわれる古代ギリシア人の哲学を読み取ることができ、それはまた、合理的な民主主義精神と人間性に支えられたものであろう。

用途からみると、ギリシアの神殿は神の像を安置し、奉納物を納めるための、いわば神の家であった。それは神殿が、ミケーネ時代の宮殿（住宅）であるメガロン様式を原型としていたことと関係あるかもしれない。特別な儀式の時を除くと、人はそこに入ることはなかった。のちのキリスト教の教会が、人が中に入るにより神と共に在るための空間であったことと比較すると、同じ宗教施設とはいえず大きな違いがある。そのためギリシアの神殿は、内部空間よりも外的な美しさが求められ、建築家の関心は破風から基壇に至る各部の比例、軒や基壇の反り、

柱間の微妙な変化、柱身そのものの形態など、外観の美的配慮に集中している。

平面は矩形もしくは円形で、円柱の上に水平の梁材をわたし小屋組みをつくる櫛式構造。そして東西方向に切妻をみせている。これは本来、木造建築にふさわしい構造であり、事実ギリシア建築は当初、木造であったという。ギリシア文明に先立つクレタやミケーネ文明において、すでに宮殿の構造材として多くの木材が使用されていたが、ギリシア建築の石の文化という図式を思い描いていたわれわれにとって、これは少なからぬ驚きでもあった。

### ギリシア神殿の平面形式



### ◎ ゼウス神殿

〈概要〉

聖地オリンピアにおける建築の中心となったゼウス神殿は、紀元前四七〇年〜四五六年にかけて建設されたといわれている。設計はエリス出身のリボンといわれるが、それ以上のことは分かっていない。パウサニアスはこの神殿について、「造りはドリス様式、外廻りは周柱廊形式、地元産の貝殻石灰岩造りである」と記している。ギリシアの建築様式は、柱を中心とした形態の違いから、一般にドリス（ドーリア）式、イオニア式、コリント式と発展を遂げる。オリンピアのゼウス神殿には、ドリス式神殿の完璧なまでの美しい姿をみることができ、正面と背面に六本ずつ、側面には一三本ずつのドリス式の石柱がめぐり、屋根には大理石の瓦が葺かれていた。その徹底したプロポーションの追求、装飾品としての大理石彫刻群など、今回の復元でもとりわけ異彩を放った建築であった。

「ギリシア神殿は彫刻である」といわれるように、ゼウス神殿もかつて、破風やメトープ、屋根などに

さまざまな彫刻群が飾られていたことが知られている。東側破風には、ゼウスを中央にして、ペロプスとオイノマオスとの戦車競走が、そして西側破風にはアポロンを中央に、ラビタイ人と半人半獣のケンタウロス族との戦いを表現した、壮大な彫刻群が飾られていた。またメトープの部分には、ヘラクレスの伝説で有名な十二の功業の図が浮き彫りにされていた。そして建物の中には、彫刻家フィディアスの傑作とされる金と象牙製のゼウス像が、右手に勝利の女神ニケを乗せ、左手に王杖を握った姿で鎮座していた。高さ一四メートルに及ぶゼウス像は、ギリシア中の評判となり、のちにはオリンピア祭のない時でも、各地からの参詣者が次々とこの像をみるために訪れたといわれる。

パウサニアスはそうした装飾の数々を克明に記録しているが、後世になってそれを裏付ける形で、ドイツ学術隊の発掘調査によって柱、軒廻り、破風彫刻の一部などが発見された。おかげで今日われわれは、ギリシア中の注目を集めた往時のゼウス神殿の姿を、ほぼ完全な形で復元することができるのである。そこでわれわれはさらに一歩進んで、このゼウス

神殿の復元を通して、あのル・コルブジエをして「他の人間の創造物で、どれがこの段階にまで達したであろう」と驚嘆なさしめたギリシア神殿の魅力をも、設計から施工の流れの中で、もう少し解説してみたいと考えた。

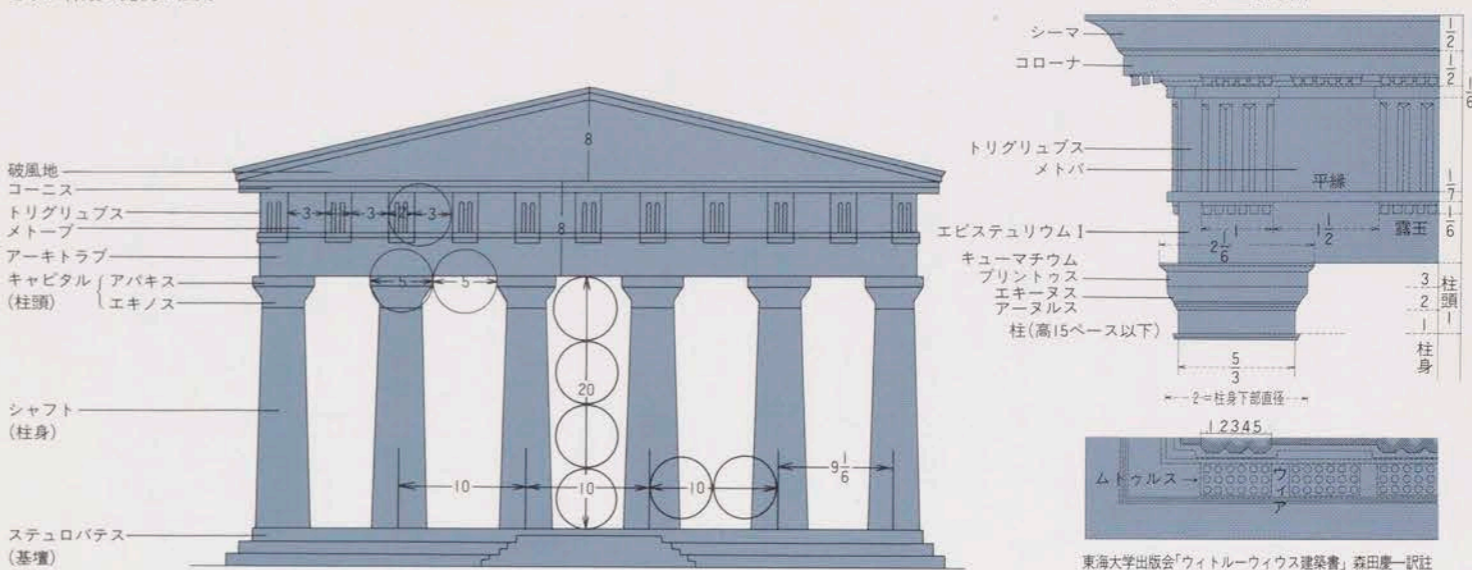
### 〈設計・施工過程の考察〉

アーキテクト（建築）という言葉は、ギリシア語のアルキテクトン（Architekton）に由来する。まさに古代ギリシアは建築の母ともいえるべき時代であった。ローマ時代初期の建築家ウィトルウィウスはその著『建築書』の中で「文学、絵画、幾何学、歴史、哲学、音楽、医療、法律、天空などの理論と実践の知識の両方を熟知した人だけが真の建築家である」と記しているように、当時の建築家の社会的地位はきわめて高いものであったことが分かる。しかしながら残念なことに、その設計方法の具体的な内容に関しては、正確にはまだ判明していない。

古代ギリシアの建築家が、ゼウス神殿のような建造物をどのようにして建てたのか、同じ設計者としてきわめて興味深いところである。そこでさまざまな資料を基に、当時の設計方法を推察してみると、



ゼウス神殿の比例の法則



東海大学出版会「ウィトルウィウス建築書」森田慶一訳注

- ・屋根瓦 テラコッタ(素焼きスレート)。ラコニア式と呼ばれるもので、精妙な装飾がみられる。
- ・東西破風 破風部分の飾りは不明だが、頂点には粘土製の円盤状破風飾り(アクロテリオンII写真参照)がのっていた。
- ・柱 創建時は木製であり、徐々に石柱へと置き換えられていった。パウサニアスは、ヘラ神殿

## ② ストア(列柱廊)建築

ストアは、神殿に次いで格式の高い建造物である。その形態はきわめて単純で、片面が壁、もう片面が列柱という、開放的な柱廊となっている。けれどもストアは、ギリシアの気候に適した建築で、日差しや雨を避けて心地よい空間を生み、また突風からの避難所ともなった。それだけにギリシア人の生活面でさまざまな用途に使われた融通性の高い建築であり、時には政治談義や商談の場などでもあった。ちなみにギリシア哲学のストア学派の名称は、アテネのストアに由来する。

紀元前五世紀頃には、ストアは都市における政治・経済活動の中核であるアゴラ(広場)の代表的な建築となり、その公共的な役割は一層高いものとなった。そうした建築が、紀元前四世紀になって聖地オリンピアに現われたことにより、周囲の景観はまったく異なったものとなったであろう。オリンピアでは、二つの代表的なストア建築が確認されている。

## ◎ エコーホール(反響廊)

○メートルに近い長さを持ち、神域とスタディオンの境界をなしている。この建築の登場は、まさに宗

- 次のような三段階で行なわれていたものと思われる。
- 1 比例の規則を決定する(基本設計)
  - 2 仕様書を詳細に記する(実施設計)
  - 3 原寸大の模型制作及び施工中の修整(現場施工)
- 比例の規則の決定
- ウィトルウィウスは『建築書』において、「神殿の構成はシユムメトリアから定まる。この理法を建築家は十分注意深く身に付けなければならぬ。これはギリシア語でアナロギアといわれる比例から得られる」と書いている。数的調和と量的比例関係を愛したギリシア人にとって、建築はその見本ともいうべきものであった。

比例の規則に関しては、熊本大学の堀内清治教授がウィトルウィウスの記述などをふまえて、「地中海古代都市の研究26」(日本建築学会)において考察をされている。その詳細をここで紹介する余裕はないが、ギリシア神殿には確かに柱間寸法、高さ寸法を決める一定のシステムが存在していたとみることができるとある。例えばゼウス神殿の中には、図に示したような比例の法則が隠されていた。こうした比例の規則を定式化し、すでに決定済みの寸法から、それぞれの部材に適当な寸法を引き出せるようにしたのである。

● 仕様書

設計内容を施工者に伝達するため、建築碑文が用いられたことが判明している。それはシンググラフィと呼ばれる仕様書で、建設方法に関してかなり詳細に建造物の概要を記述したものである。例えばJ・J・クルトンは『古代ギリシアの建築家』の中で、エレシウスの建築家フィロンが書いた仕様書を紹介している。それは石材の産地、切り出し寸法、設置方法、仕上げに至るまでの指示である。ゼウス神殿においても、こうした仕様書が書かれたであろうことは想像に難くない。

の後室で一本の楹の柱をみたことを記している。また石柱にも時代の違いがあり、様式の違いにドリルス式円柱の発展過程をみる事ができる。そのため柱の太さも揃わず、異なる四様式が入り混じる特異な外観を呈していたと思われる。ゼウス神殿をドリルス式神殿の完成形とすると、ヘラ神殿はエリス地方の土着的要素が保存された神殿

教と競技との明確な分離を意味しているといえるだろう。

エコー(反響)の名称は、この建物の中では声が七度響くことに由来するといわれる。しかし、復元した限りでは、当初からそうした音響計画に基づき建設されたものかどうか、疑問である。例えば古代ギリシアの野外劇場はすり鉢状をしていて、それは観客の視線を意識したものであり、音響効果はむしろ偶然の産物であったとされている。このエコーホールも計画的ではなく、単一パルスにより多くの反射パルスが急速に繰り返される、いわゆるフラッターエコー現象が起こったのではないだろうか。このホールの中央には演壇があり、そこで多くの詩人、歴史家、雄弁家らがその作品を大衆に向かって発表したりと伝えられているが、在りし日のその朗々とした声の響きが想像される。またその内部は壁画で飾られており、オリンピア祭の時には神域で行なわれる儀式や行列をみる観客が、この建物に詰めかけたともいわれる。

エコーホールの形態については、ドイツ学術隊の発掘調査とマルヴィッツが発表した図面を参考に復元した。建物の東側に付随する低い屋根の部分は、発掘図面では増築されたものと思われたが、マルヴィッツは建物本体と同時に建てられたと判断してい

● 建設現場

建設工事が始まってからも、建築家は究極の美を求めて、設計を続けていた。工期が長期間に及ぶ場合には、後から設置される部分に関しては、新しい様式が採用される場合すらあった。またギリシア建築にとって非常に重要な視覚的効果の精度を高めるため、実物大の模型や図面をつくったものと思われ、ゼウス神殿のものでないが、近年そうした原寸図も見られている。

## ◎ ヘラ神殿(ヘライオン)

ゼウスの后ヘラを祀るヘラ神殿は、現存するギリシア最古の神殿の一つであり、紀元前七世紀末の建設といわれている。神殿全体は細長いプランを持ち、ゼウス神殿よりは小さいが重厚な印象を与える。ギリシア建築史の記念碑的存在と呼ばれるにふさわしい神殿である。

その本尊は玉座のヘラ像とその傍に立つヘルメット姿のゼウス像だが、本来はゼウスとヘラの両神を祀ったのではないかと、とする推察もなされている。ローマ時代には、この神殿は一種の美術館として機能していたようであり、「イフィトスの円盤」、「キュプロスの箱」、そしてプラクシテレス作といわれる有名な「赤子のディオニソス」をあやす「ヘルメス像」など、歴史と伝説を彩る数々の奉納物が置かれていた。神殿の上部は木造であったため残っておらず、詳細については知られていない。今も残る下部構造やマルヴィッツによる復元模型などを参考にすると、次のような建築であったと推察される。

- ・壁 上部は日乾レンガ製。下部は、基礎を含めてオリンピア産の貝殻石灰岩製の石材。内室の両側面に、四か所の舌状突起がみられるが、これは補強用壁と考えられている。
- ・梁 材木

であったとも考えられる。それはヘラ神殿が、少しずつ修理する方法によって、部材にその歴史的経緯を残しているからである。当時の人々は、アルカイック時代のオリンピック精神を伝える初期建築として、意識的に伝統保存を考慮しながら、修理・改築を重ねたとも解釈することができる。

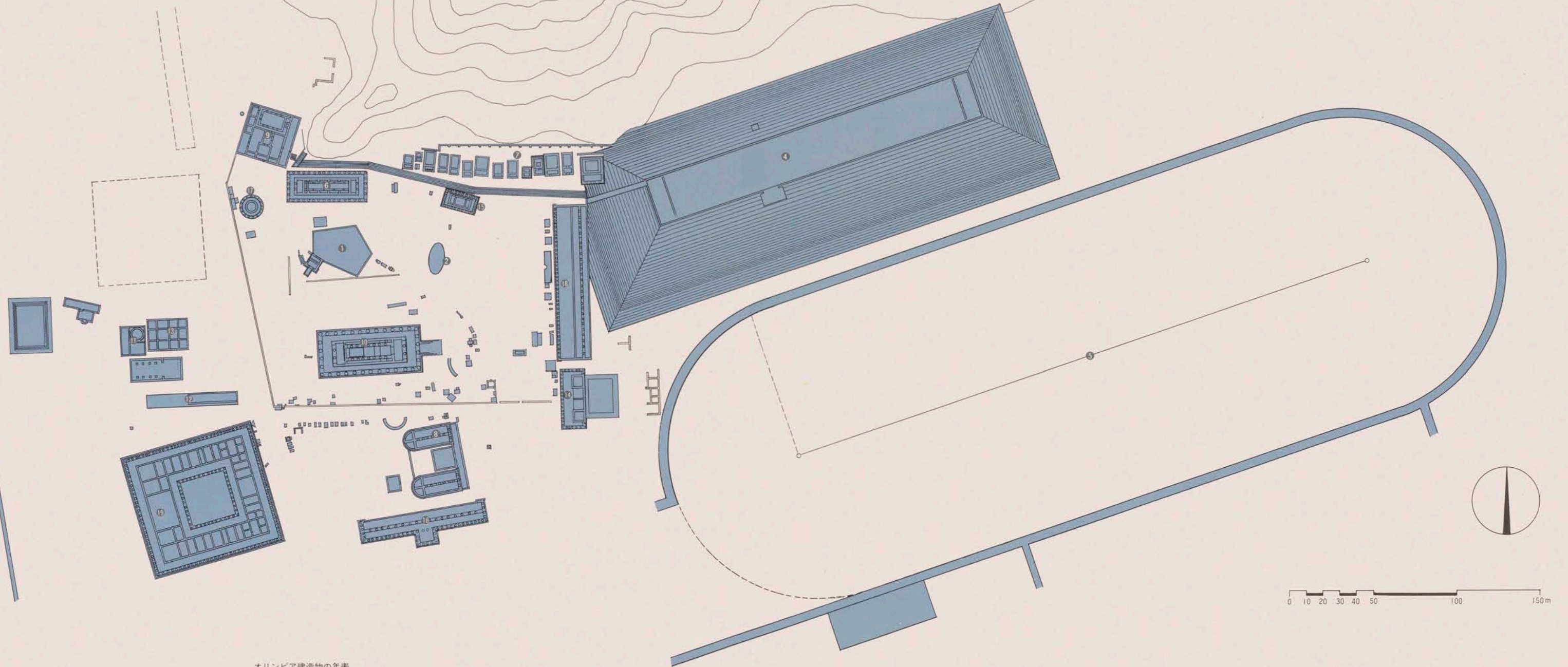
また東側の屋根を支える柱も、マルヴィッツは木造としている。これは屋根の加重や建造年代から判断して、他のストア建築にみられる一般的な工法をここでも採用したものであろう。

## ◎ 南ホール

このホールは、エコーホールとほぼ同時代に建てられ、床と階段が大理石製である点など類似点も多い。しかし、中央に突出部を持つ点が大きく異なっており、そこに当時の建築家の試行錯誤の一端をみる思いがする。というのも長大な柱廊の場合、両端を何らかの形で限定したり、あるいはどこかに芸術的な焦点を置かないと、建築的な完成度を得にくい。従って中央の突出部は、用途面からよりも、完成度を追求する建築家の美意識の産物であると想像される。事実、同時代に他の地域で建設された柱廊には、両端に突出部を持つものや、背面に二か所の突出部を持つのがみられ、いずれも建築家の工夫の跡と思えるからである。

マルヴィッツの復元図によると、中央の突出した部分では列柱が切り取られた形となっており、この部分が増築であるかのような印象を受けた。そこでグリッド寸法を計算してみたところ、突出部は当初から考えられたデザインであることが確認できた。

B.C. 5 ~ 4 世紀のオリンピアの復元配置図



オリンピア建造物の年表

| 名称 | 用途                  | B.C.           |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    | A.D. |    |    |    |
|----|---------------------|----------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|------|----|----|----|
|    |                     | 10c            | 9c | 8c | 7c | 6c | 5c | 4c | 3c | 2c | 1c | 1c | 2c | 3c   | 4c | 5c | 6c |
| ①  | ペロプスの祭壇 (祭壇)        | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ②  | ゼウス祭壇 (祭壇)          | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ③  | 舟形神殿 (神殿)           | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ④  | スタディオン (競技場)        | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑤  | ヒッポドロモス (競馬場)       | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑥  | ヘラ神殿 (神殿)           | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑦  | 宝庫群 (小神殿)           | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑧  | プトレウテリオン (評議会場)     | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑨  | プリュタネイオン (宿泊・祝宴会場)  | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑩  | ゼウス神殿 (神殿)          | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑪  | ヘローオン (記念建物)        | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑫  | フィディアスの工房 (ゼウス像製作場) | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑬  | テオコレイオン (神官の住居)     | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |

| 名称 | 用途              | B.C.           |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    | A.D. |    |    |    |
|----|-----------------|----------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|------|----|----|----|
|    |                 | 10c            | 9c | 8c | 7c | 6c | 5c | 4c | 3c | 2c | 1c | 1c | 2c | 3c   | 4c | 5c | 6c |
| ⑭  | 南東会館 (審判員宿舎)    | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑮  | メトロオン (神殿)      | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑯  | 南ホール (広場のホール)   | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑰  | フィリペイオン (記念建物)  | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑱  | エコーホール (列柱廊)    | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑲  | レオニダイオン (宿舎)    | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ⑳  | パライストラ (体育館)    | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ㉑  | ギリシア住宅 (住宅)     | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ㉒  | ギムナシオン (練習場)    | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ㉓  | ニュームバイオン (給水施設) | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ㉔  | 宿泊施設 (宿舎)       | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ㉕  | 東浴場 (浴場)        | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |
| ㉖  | 南浴場 (浴場)        | [Timeline bar] |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |      |    |    |    |

オリンピア残像—現在のオリンピア遺跡



スタディオン入口（アーチ部はローマ時代）



スタディオン



ヘラ神殿



宝庫



ブウレウテリオン



ゼウス神殿



ゼウス神殿



フィディアスの工房（後にビザンチン教会として使われ意匠が大きく変えられた）



メトロオン



南ホールの柱頭（コリント様式）



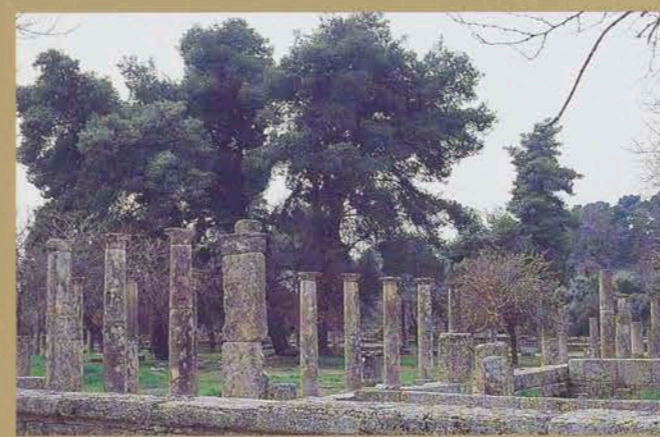
フィリペイオン



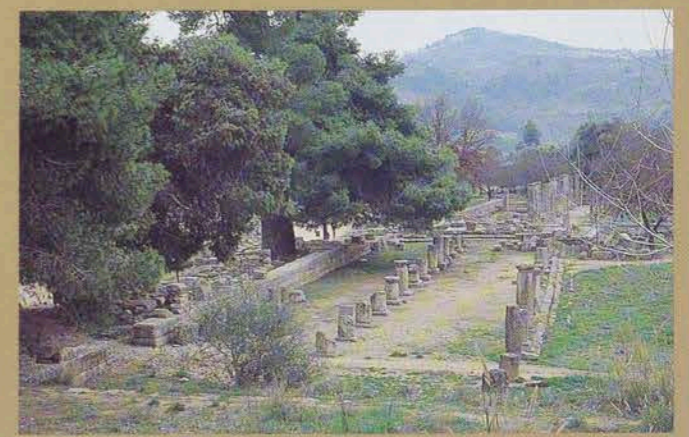
エコーホール



レオニダイオン（中庭の庭園はローマ時代に造られた）



パライストラ（方形体育館）



ギムナシオン（体育訓練場）

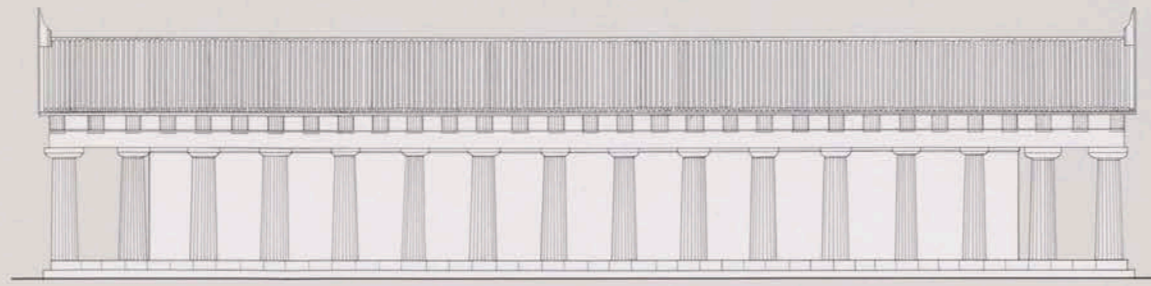
150m

6c

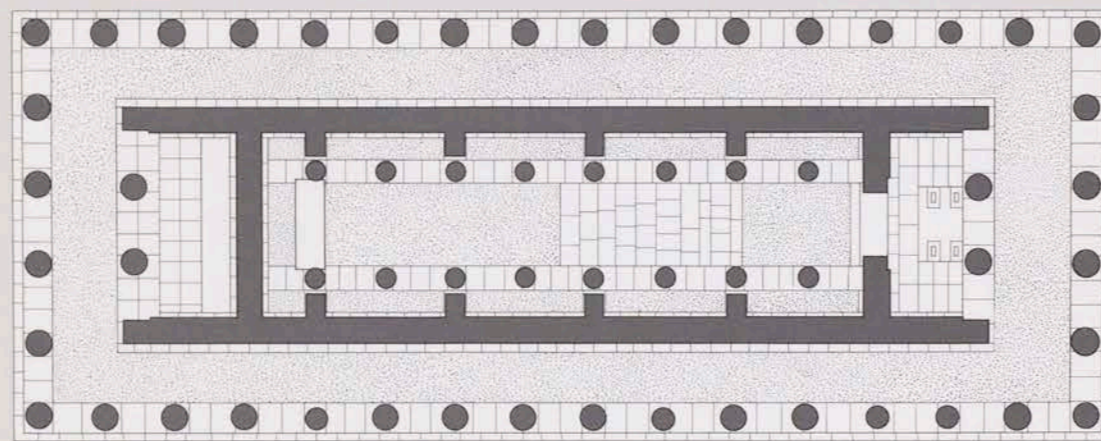
ヘラ神殿



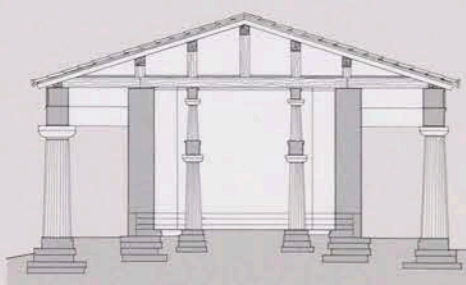
東立面図



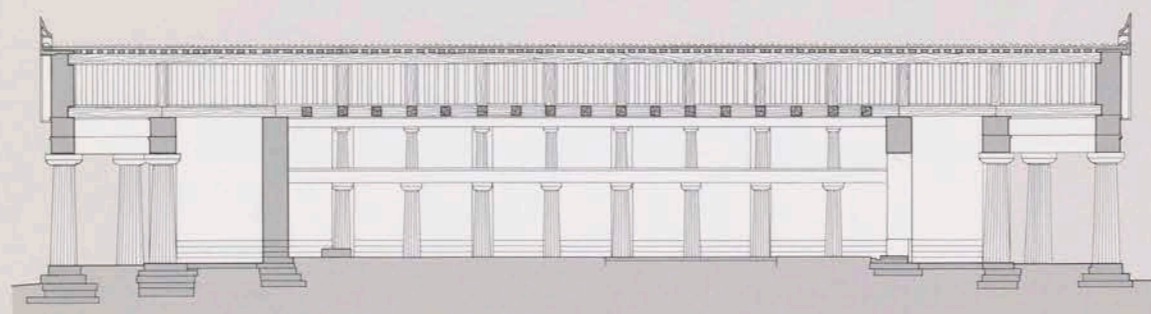
南立面図



平面図



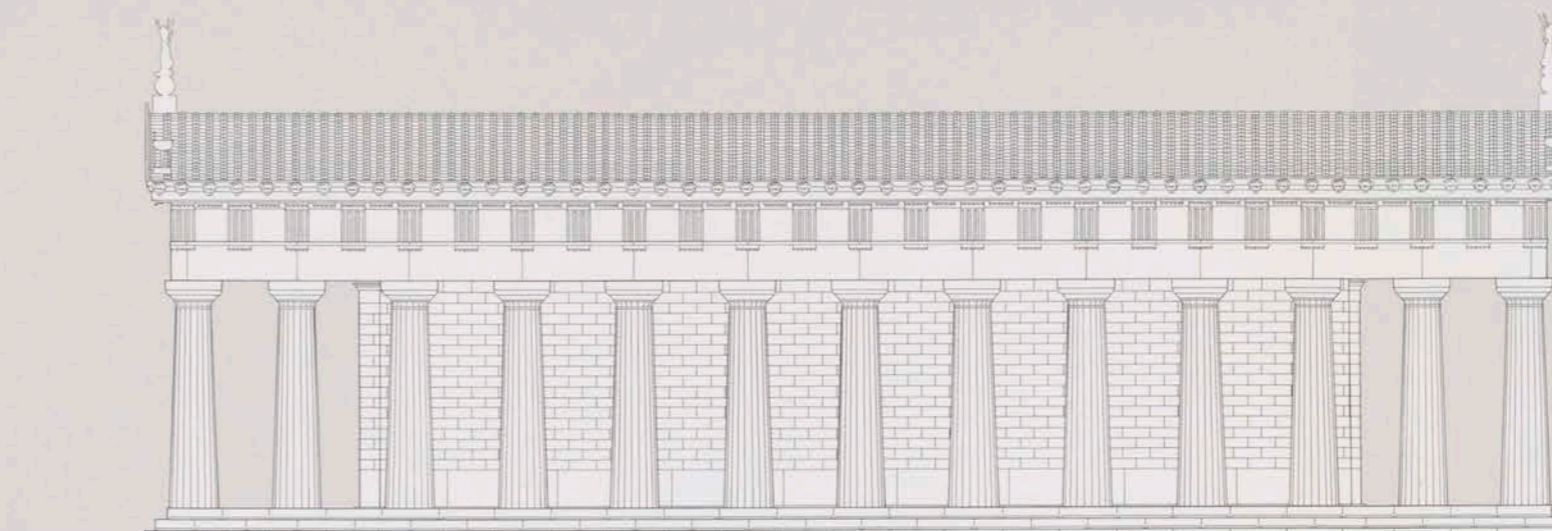
横断面図



縦断面図

図面の復元に当たっては、アルフレッド・マルヴィッツ「オリンピア—その建築」、ドイツ学術隊発掘調査報告「オリンピアの記念建造物」、ニコル・ヤルウリス「オリンピア—神域と博物館」、ドイツ考古学研究所/アルフレッド・マルヴィッツ監修「オリンピアの研究、エコーホール」(1984学術調査)を参照し、大林組プロジェクトチームで新たに作図した。

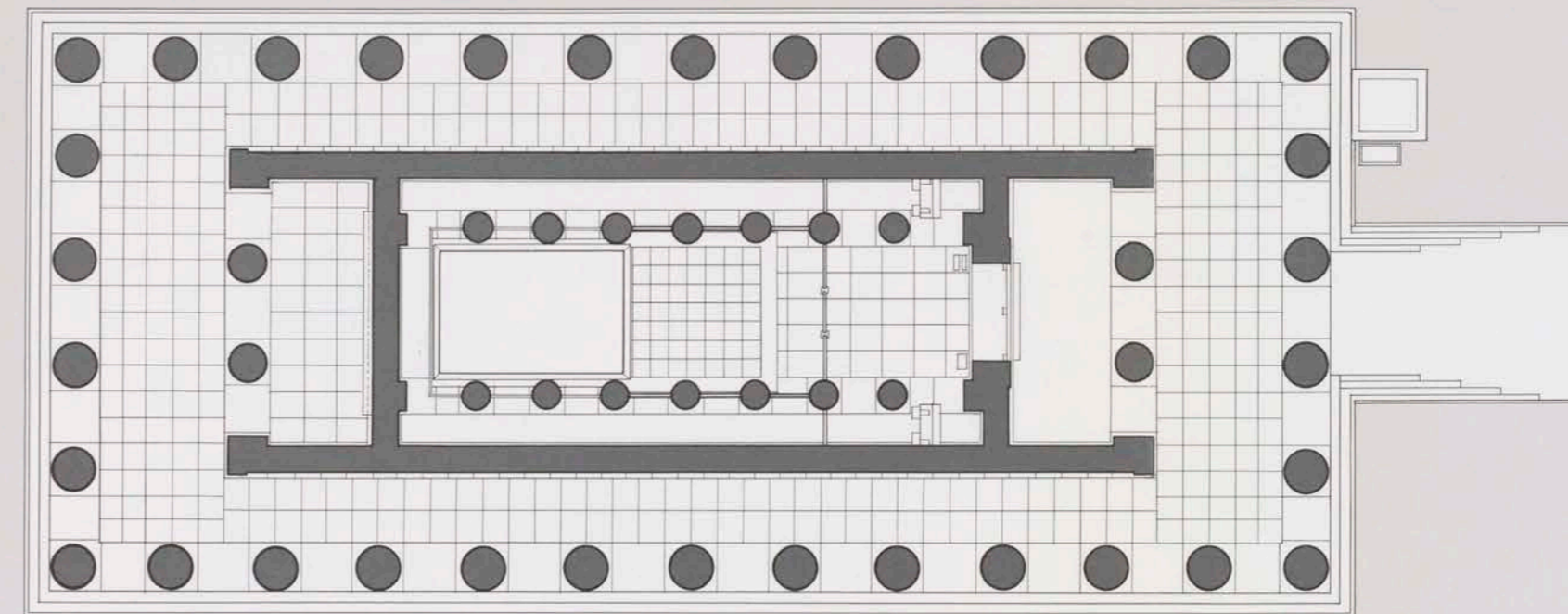
ゼウス神殿



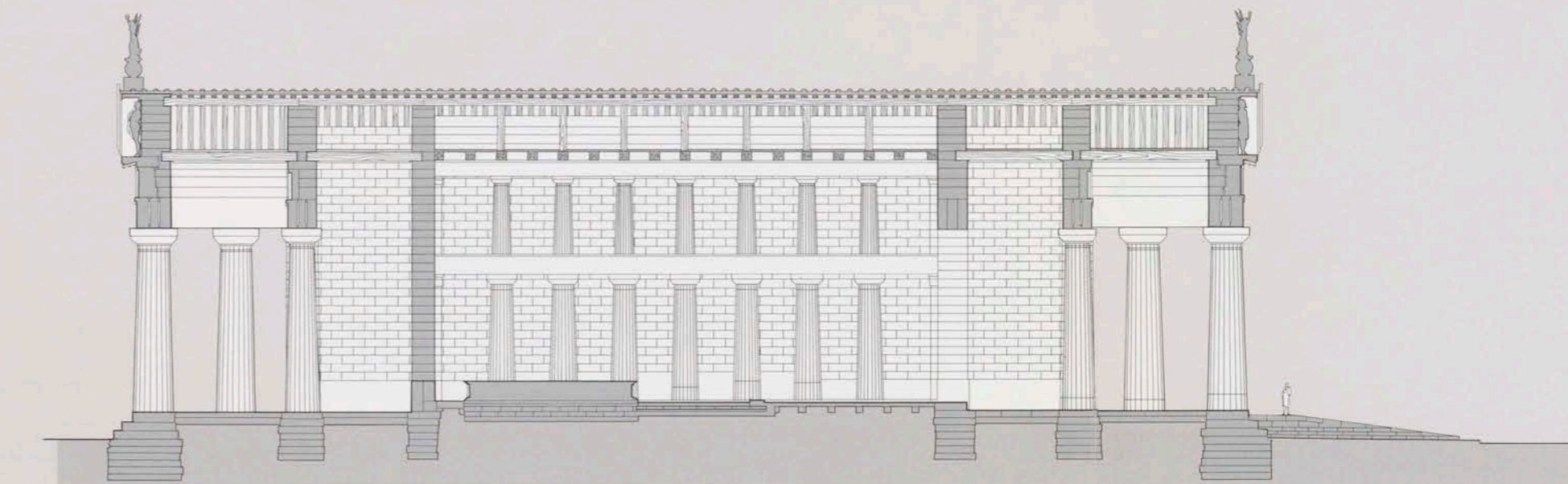
南立面図



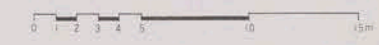
東立面図



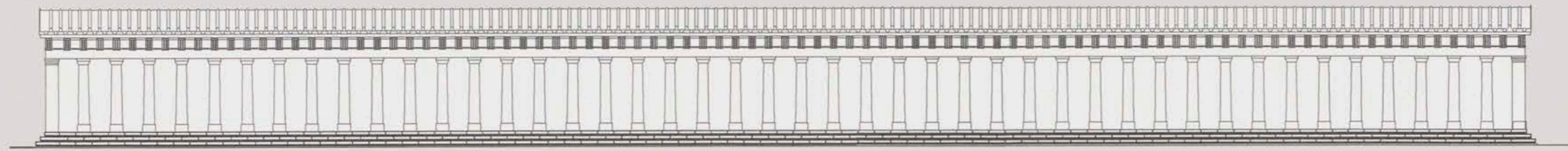
平面図



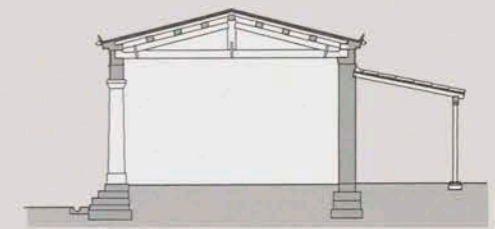
断面図



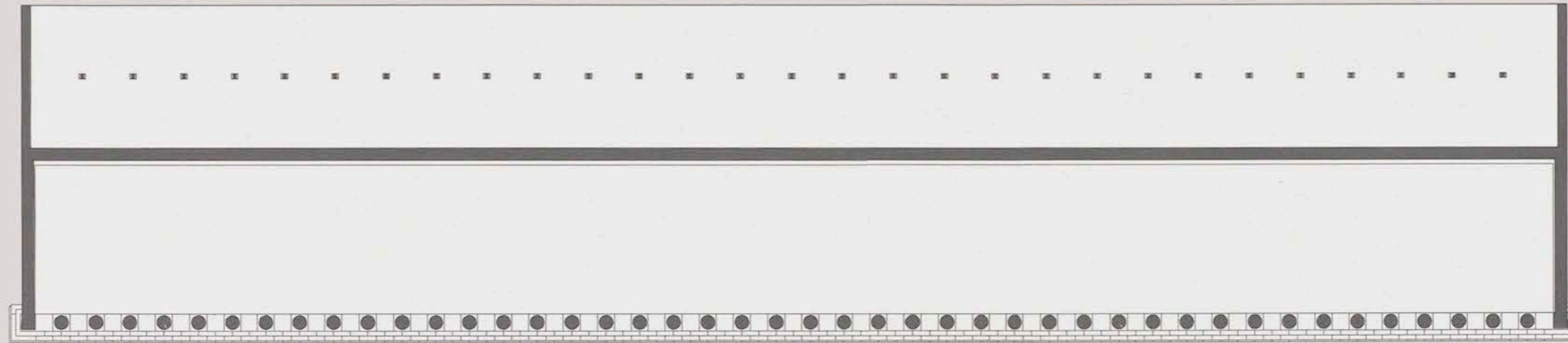
エコーホール



西立面図



断面図



平面図

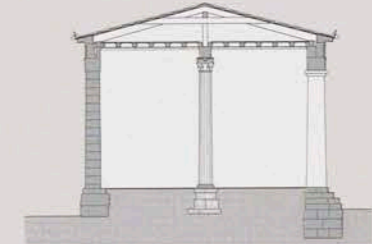
南ホール



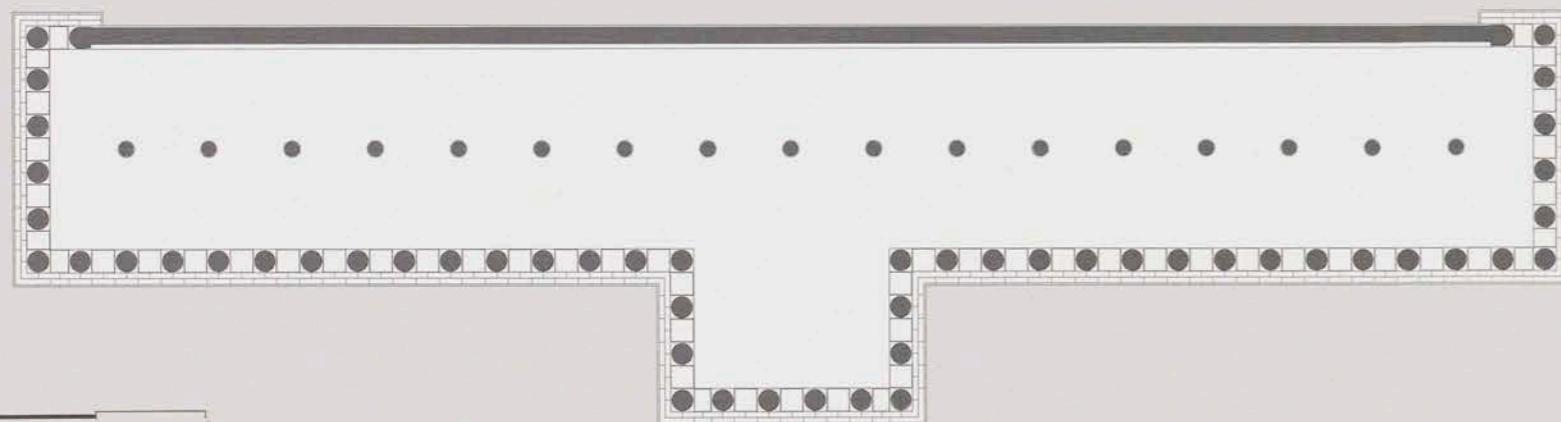
南立面図



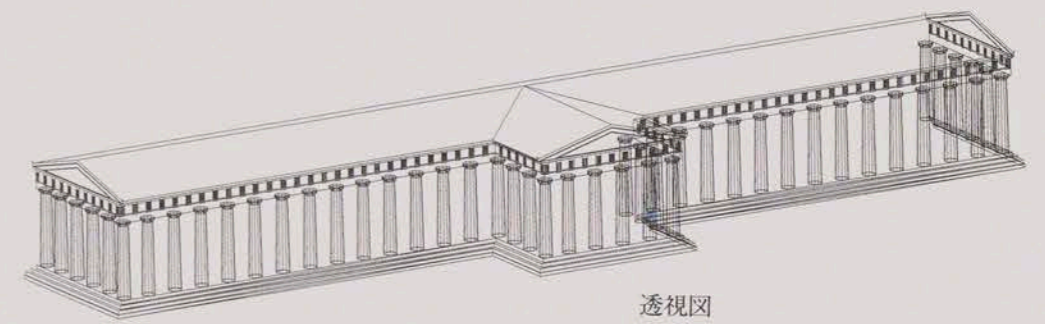
東立面図



断面図

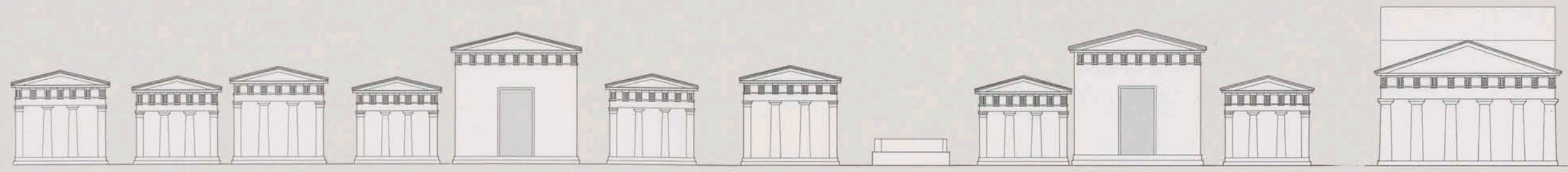


平面図

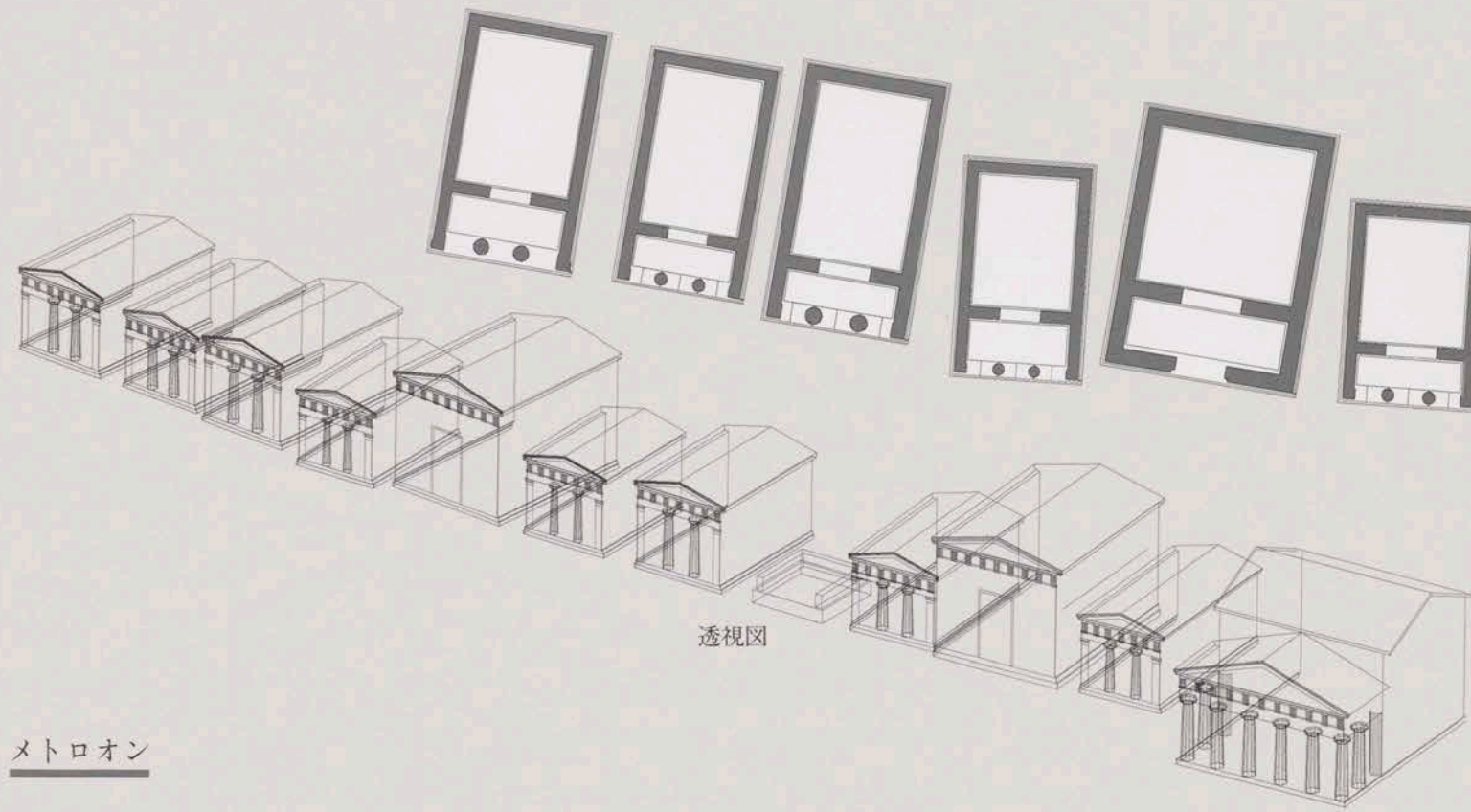


透視図

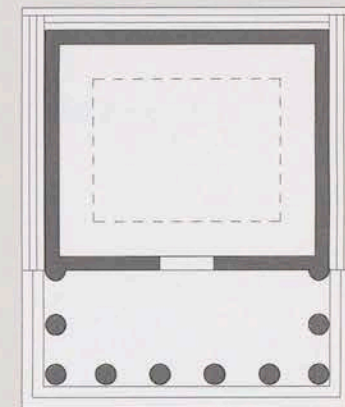
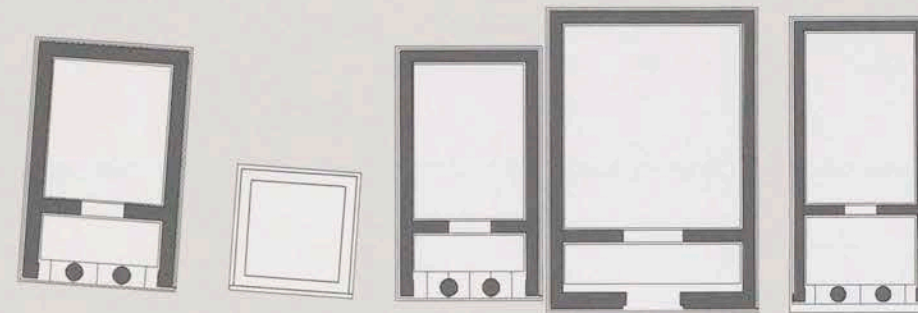
宝庫群



南立面図



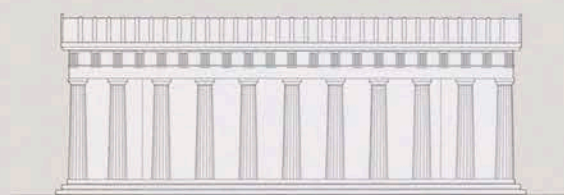
透视图



配置図

メトロオン

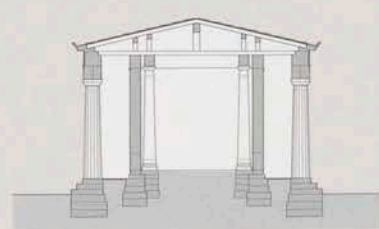
南東会館



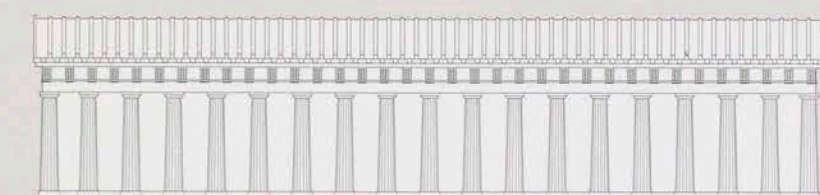
南立面図



東立面図



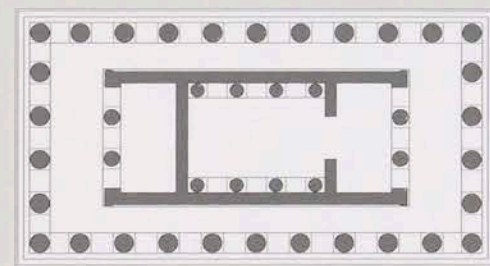
断面図



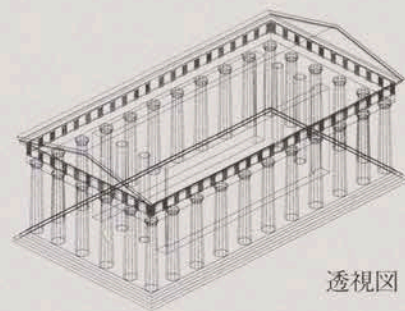
西立面図



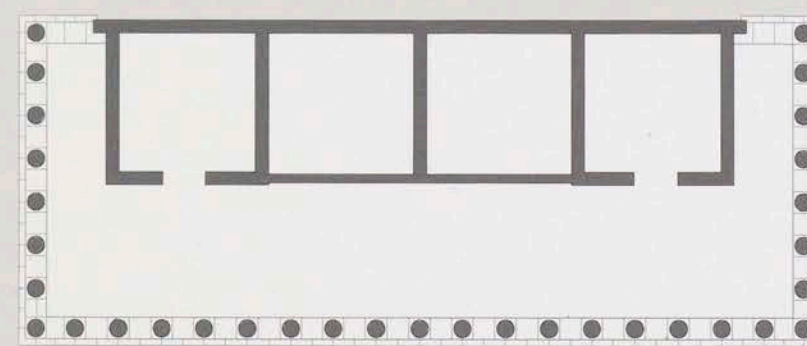
南立面図



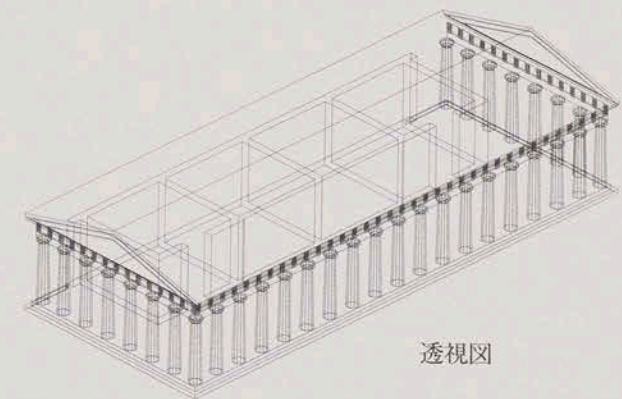
平面図



透视图



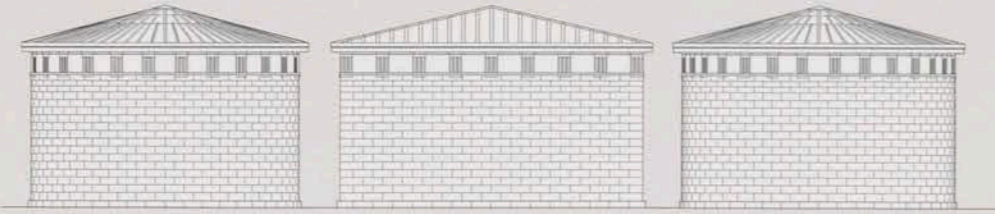
平面図



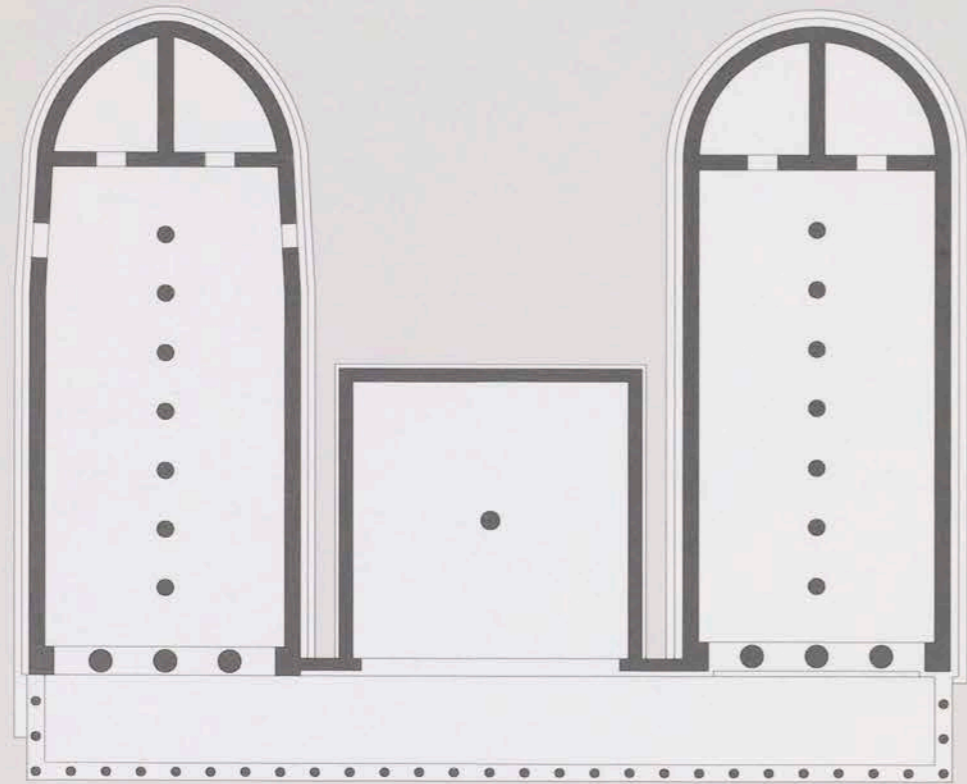
透视图



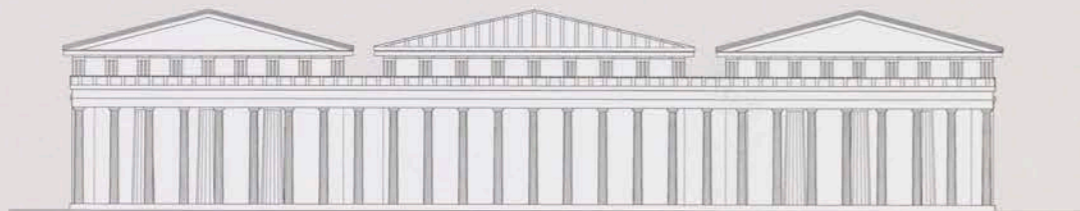
ブウレウテリオン



西立面図

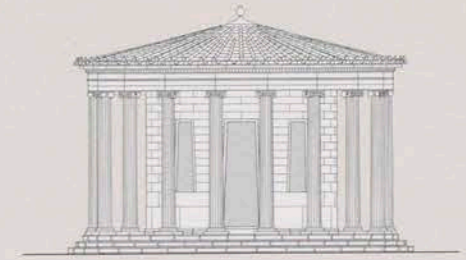


平面図

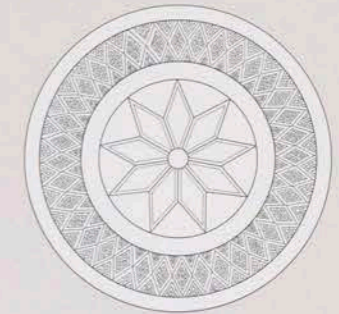


東立面図

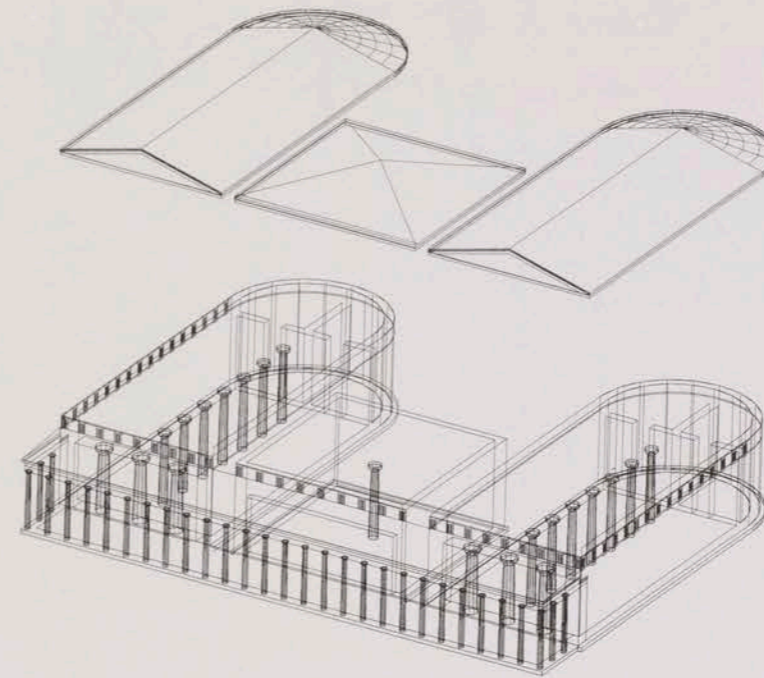
フィリペイオン



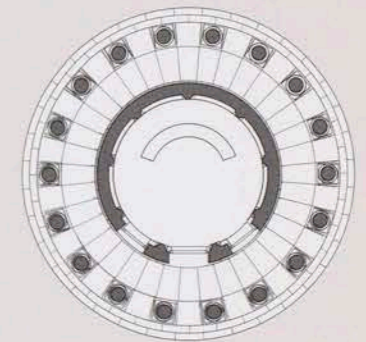
東立面図



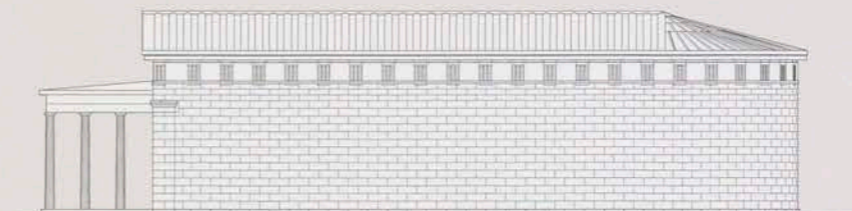
天井伏図



透視図



平面図

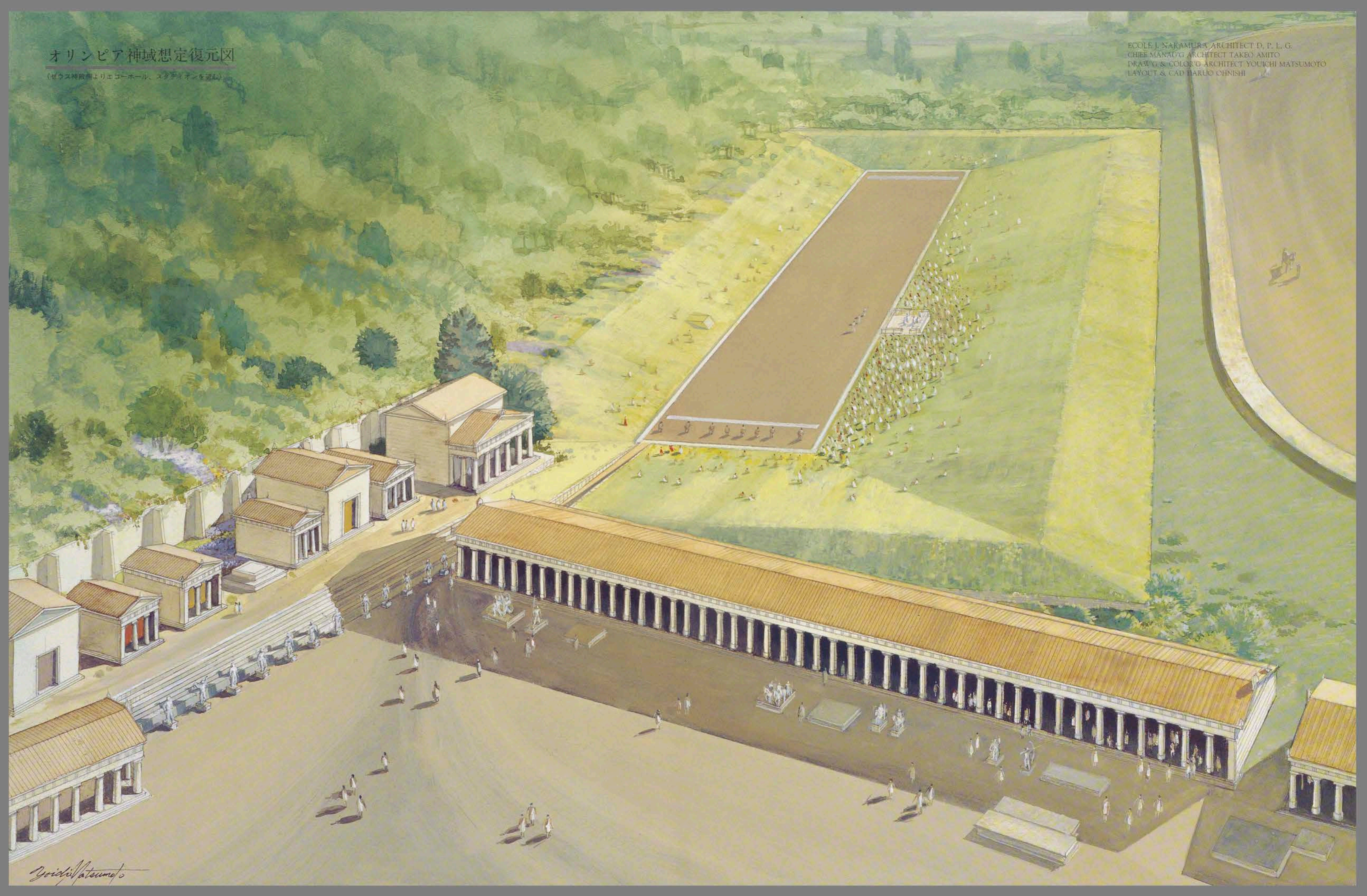


北立面図

# オリンピア神域想定復元図

(ゼウス神殿よりエコーホール、スタジアオンを含む)

ECOLE J. NAKAMURA ARCHITECT P. L. L. G.  
CHIEE MANAGG ARCHITECT TAKEO AMITO  
DRAW'G & COLOR'G ARCHITECT YUICHI MATSUMOTO  
LAYOUT & CAD HARUO OHNISHI



*Yuichi Matsumoto*



### ③ その他の主要建築

オリンピックには、その他にも歴史的に重要な施設が数多く建設されていた。そのうち、復元を試みた建築は次のとおりである。

#### ◎宝庫群

クロノスの丘の南麓には、宝庫群がある。これらはオリンピック祭に参加した各都市（ポリス）や個人が寄進した奉納物を納めた宝物殿で、古いものは紀元前七世紀に遡ることができる。奉納した都市名をみると、ビュザンティオン（現在のイスタンブール）、メガラ（アテネの西隣）、キレネ（アフリカ北岸）、シラクサ（シシリー島）など、その範囲はギリシア及びその植民都市を含む全土に及んでいる。かつてオリンピック祭が、ギリシア中から大きな関心を集めていた様子が偲ばれる。

宝庫群については、ドイツ学術隊の資料では配置図はあるものの立面についてはほとんど記されておらず、マルヴィッツの作成した模型などを基に検討を加えた。平面と立面の比率を対一と定め、柱の太さはその高さに比例してコンピュータによって拡大、縮小を繰り返し行ない、妥当な数値を求めた。宝庫群の方向軸は一見まとまりがなく、バラバラに建てられたように見えるが、検討の結果、ほぼ三種類の方向に大別されることが分かった。またデザインについては、すべてが全く同じであるのは不自然と考え、三つの宝庫に関しては他と区別して復元した。

#### ◎ブルーレテリオン（評議会場）

神域の外の南側にあるブルーレテリオンは、古くは貴族階級が、のちには市民たちが政治上の業務を

行なった場所であり、評議会場とも市会所とも訳されている建物である。オリンピックにおいてはそればかりでなく、競技会の組織運営を行なう重要な場所でもあった。オリンピック祭の時には、競技の第一日目にすべての参加選手がブルーレテリオンの前に集められ、宣誓が行なわれた。この建物にあった「誓いのゼウス像」の前で、犠牲の野豚を捧げ、一切の不正をしない旨を誓ったのである。

ブルーレテリオンの建築形態は、非常に特殊である。東西軸を持つ二つの細長い建物と、それらをつなぐ正方形の建物とから成っている。細長い建物には、いずれも西端部分に二つの部屋に分割された半円形の祭室がある。この奇妙な形態の源泉をさぐるに、神域内（ヘラ神殿の東側）で発掘された先史時代の建物の形態を継承していることが分かった。とくにドイツ学術隊の図面から半円形の祭室部分をよくみると、北側の建物では翼部の壁が直線であるのに対し、南側の建物では長手方向に壁全体が緩やかな曲線をなしていることが判明した。これは南側の建築形態がより原始的であることを示しており、昔のプランが残っていたものと思われる。

ドイツ学術隊の資料を基にして立面の復元を図ったが、屋根の形状についてはマルヴィッツの模型を参考にした。この建物が先史時代のプランを残していることから、葺き屋根の可能性についても検討したが、オリンピックの全盛期にブルーレテリオンだけが葺きであったとは考えられないので、ここでは瓦葺きとした。

#### ◎メトロオン

宝庫群の南側にあるメトロオンは、ゼウスの母レアを祀る小型の神殿である。アテネの盛期クラシックの競技を行なうための場所、それがスタディオオンであった。

オリンピックのスタディオオンは、ドイツ学術隊の発掘調査によれば三度にわたり造営されたことが判明している。最初のアルカイック時代のスタディオオンは、神域と重なる形で建設された。宝庫群の南側に東西に細長く敷地がとられ、その西端のゴールはゼウスの大祭壇に向かうような位置にある。紀元前五世紀前半に造営された第二期のスタディオオンは、かなり東へと移動したが、それでもまだ神域と幾分重なる位置にあった。トラック部分は一段低く造られ、両側には観客席となる土手も築かれていた。

われわれが今日みることのできるのは、発掘された第三期のスタディオオンの跡である。エコーホルルの東に、クロノスの丘の南麓を掘り下げる形（神域の地表より四メートル低い）で造営された。のちに神域とトラックを結ぶトンネル状の長いゲートが造られ、選手たちはこのゲートをくぐり抜けてトラックに登場する演出がなされた（現在も遺構として

リユタネイオンには炉の女神ヘステイアが祀られ、聖火が管理されていた。この炉でつくられた灰が、ゼウスの大祭壇の材料に使われていたのである。

#### ◎レオニダイオン（迎賓館）

神域の外の南西隅にあったレオニダイオンは、約八〇メートル四方もある大きな建物である。建築家でありオーナーでもあったレオニダスが、紀元前三三〇年頃に建設したといわれている。列柱に囲まれた中庭には池があり、そのまわりに並ぶ数多くの部屋には、当時の賓客や貴族たちが宿泊した。現代風にいえば、オリンピック祭に集う特権階級のための迎

クの神殿群と、ペロポネソスの後期クラシックの神殿群との中間に位置する建築で、紀元前四世紀頃のものと考えられている。しかしローマ帝政期になると、皇帝アウグストゥスを祀る神殿となり、以来ローマ皇帝の礼拝所として利用された。その関係で、ここには数多くのローマ皇帝の彫像が置かれていた。

この神殿の平面計画で特徴的なことは、神室の中の柱が壁に近接して据えられていることである。これはデザインというよりは、構造的にこの場所に東が必要となったものと思われる。このことを前提として、ドイツ学術隊の図面では空白となっていた屋根架構について検討を加え、その姿を復元した。

#### ◎フィリペイオン

神域の内、ヘラ神殿の西にあった円形の建物がフィリペイオンである。マケドニア王フィリップ二世が、紀元前三三八年にアテネ・テーベ連合軍を破り、スパルタを除くギリシア統一を果たした。そのフィリップ二世が、一族の栄光を記念してオリンピックに建立し、息子のアレキサンダー大王が完成させたといわれている。マケドニアは以前からオリンピック祭に参加していたが、この聖地に記念堂を建て、ゼウス像を真似た金と象牙製の一族の像を納めることで、自らの勢力を誇示したのである。今も残る大理石製の基壇の上には、かつて十八本のイオニア式の柱が巡り、その円形の建物は、当時から美しい建築として知られていた。またパウサニアは、「建物の頂上にブロンズの『けし』があり、これが垂木をひとつに絞めている」と記している。

この建築については、クルテイウスやマルヴィッツの復元案が残っているが、ここではマルヴィッツの案を採用して転載した。

ゲートの一部が残っている。トラック部分の地表の東西両側からは、溝を持つ敷石の列が発見されている。これはスタートラインであったといわれ、二〇人が横に並んで走れるだけの幅を持っていた。この二本の敷石によって、オリンピックの一スタディオンの長さが判明したのである。

スタディオオンの観客席はトラックを囲む土手であり、北側と東側はクロノスの丘の傾斜を利用し、また南側は盛土をして造られていた。ギリシアの有力な都市、例えばアテネにおけるスタディオオンは、のちに観客席はすべて大理石の立派な座席に造り換えられた。しかし非常に興味深いことに、ギリシア全土の崇敬を集めたオリンピックでは、スタディオオンの観客席は（審判席を除いて）最後まで土手のままであった。それだけに建築的には初期の形態をよく残したスタディオオンであり、われわれがオリンピックの現地調査を行なった際にも、花の咲き乱れる観客席に立つと、遠く風の音に乗って太古の競技会の熱狂が伝わって来るかのような興奮を覚えた。

#### ◎パライストラとギムナシオン

パライストラとギムナシオンは本来古代ギリシアのどこの都市にもあって、少年たちを鍛えるための体育練習場であった。体育は古代ギリシアにおいてとりわけ重要な位置を占めており、D・B・ヴァンダーレンが『体育の世界史』で述べているように、「神や超人と競えるほどの卓越した個人の育成」を目的として、合理的な訓練が行なわれたのである。しかしその一方で、これらの建物には若者たちが集まるため、ソクラテスのような哲学者もしばしば

#### ◎スタディオオン（競技場）

オリンピック祭における競技会の主要舞台であるスタディオオンは、全盛期には四万から五万人もの観客が入ったといわれる大規模なものであった。観客たちは真夏の暑い日差しの下、傾斜のついた土手に腰を下ろし、熱狂的な声援を送ったのである。

スタディオオンという語は本来は距離の単位だが、その長さは地域によって異なっていた。例えば一スタディオオンが、デルフォイやアテネでは約一七八メートル、エピダウロスでは約一八一・三メートルであるのに対し、オリンピックは最大の一九二・二七メートルもあった。それはオリンピック祭の創始者の一人と伝えられるヘラクレスが大男であり、大きな歩幅で測ったところ、この距離になってしまったのだという。一スタディオオンという距離は、人間が全力で走ることのできる限界とされ、それだけに一スタディオオンの徒競走はオリンピック祭でも最古の競技として第一回大会から行なわれている。というよりは、

### ④ 復元した以外の主要建築

今回の復元ではスペースの関係などから配置図に入れるに留めたが、オリンピックにはその他にも重要な建築物がいくつかある。最後にそれらを列挙しておきたい。

#### ◎プリユタネイオン

ヘラ神殿の北西にあったプリユタネイオンは、正確な用途の分りにくい建物である。一般の都市においては、迎賓館と高級官僚のための役所を兼ねた場所といわれる。だがオリンピックでは外国人大使やオリンピック競技の勝者に食事を供した場所とされ、建物も住宅建築に近い。しかもそれだけでなく、プ

古代オリンピック小史

| 西暦                   | 時代                               | ギリシア・ローマ史   | オリンピック史   | 競技大祭関係史   |
|----------------------|----------------------------------|---|---|---|
| B.C. 1950頃           | ミケーネ時代                           | ●ギリシア人の第一次南下と定住はじまる<br>●ミケーネが盛んとなる  | ●この頃から祭典競技がおこなわれる   |   |
| 1200<br>1100<br>1000 |                                  | ●トロイア戦争がおこる<br>●ギリシア人の第二次南下と定住<br>●ドーリア人や西北方言群の民族がペロポネソス半島に入る   | ●エリス人がアイトリアからエリス地方に入る   |   |
| 900<br>800           |                                  | ●ポリスが形成され始める  |   | ●第1回古代オリンピック競技大祭 [B.C.776]<br>●優勝者にオリーブの枝冠を授与するようになる [B.C.752]<br>●第15回大祭より競技は裸体で行うようになる [B.C.720~B.C.580]<br>●スパルタがオリンピック競技大祭で最も活躍 [B.C.720~B.C.580]<br>●オリンピック競技大祭の期間が2日間となる<br>●「競馬競技」が導入される<br>●「少年競技」が導入される<br>●オリンピック競技大祭の期間が3日間となる [B.C.632] |
| 700                  | ●ホメロスの「イリアス」が著される<br>●ローマ市が建国される | ●現存のヘラ神殿(ヘライオン)建設される  |   |   |
| 600                  | 植民市建設時代                          | ●僭主が出現する<br>●アテネでソロンが大改革を行う<br>●デルフィの聖戦<br>●アテネが僭主支配となる<br>●第一次ペルシア戦争がおこる(マラ톤の戦い)<br>●第二次ペルシア戦争がおこる(テルモピライの戦い)(サラミス海戦でペルシャ軍敗北)(プラタイアイの戦い) | ●植民市が宝物殿を建造する<br>●オリンピック競技大祭を歌ったピンダロスの頌詩                      | ●少年による「五種競技」が導入される<br>●ピュティアで競技大祭が開始される<br>●スパルタがオリンピック競技大祭において消極的になる   |
| 500                  |                                  | ●アテネ民主政治の完成<br>●バルテノン神殿完成<br>●ペロポネソス戦争おこる<br>●古代ギリシア第一の歴史家ツキジデスの活動  | ●現存のゼウス神殿ができる<br>●ヘロドトスが「歴史」をオリンピックにて発表する<br>●フィディアスがゼウス像をつくる | ●ネメアで競技大祭が開始される [B.C.573]   |
| 430                  | (民主政期)                           | ●アテネ民主政治の完成<br>●バルテノン神殿完成<br>●ペロポネソス戦争おこる<br>●古代ギリシア第一の歴史家ツキジデスの活動  | ●スバルタがエリスを侵襲する<br>●哲学者プラトンが活動<br>●哲学者アリストテレスが活動               | ●オリンピック競技大祭の期間が5日間となる [B.C.472]<br><br>●エリスのヒッピアスによる優勝者録ができる<br>●第98回大祭で最初の買収がおこなわれた [B.C.388]<br>●無効のオリンピック競技大祭 [B.C.364]<br>●第112回大祭で買収 [B.C.332]   |
| 400                  |                                  | ●コリントス戦争おこる   | ●スタディオンとフィリペイオンができる<br>●レオニダイオンが建造される                         |   |
| 300                  | ヘレニズム時代                          | ●マケドニアがギリシアを統一<br>●アレクサンダー大王東征にたつ   |   |   |
| 200                  |                                  | ●ローマがイタリア半島を統一<br>●第一次マケドニア戦争おこる<br>●ローマ勢力がギリシアにのびる<br>●ローマ、コリントスを破壊する<br>●ローマの実権確立<br>●ローマの内乱による戦場化<br>●コリントス再建される<br>●オクタウィアヌスが地中海世界を統一 | ●選手のプロ化がおこる   | ●ローマでオリンピック競技大祭が開催される [B.C.80]  |
| 100                  | ローマ帝政期                           | ●ローマがイタリア半島を統一<br>●第一次マケドニア戦争おこる<br>●ローマ勢力がギリシアにのびる<br>●ローマ、コリントスを破壊する<br>●ローマの実権確立<br>●ローマの内乱による戦場化<br>●コリントス再建される<br>●オクタウィアヌスが地中海世界を統一 | ●オリンピック競技大祭が衰退の時代を迎える   | ●オリンピック競技大祭再復興<br>●第211回大祭開催年が変更される [A.D.65]<br><br>●旅行家パウサニアスが「ギリシア案内記」の中でオリンピックの記事を書く [A.D.241]<br><br>●ギリシア世界以外から優勝者がでる<br><br>●最後のオリンピック競技大祭(第293回) [A.D.393]<br>●テオドシウス1世により大会廃止の勅令がだされる [A.D.394]   |
| A.D. 1               |                                  | ●ローマ帝政の最盛期<br>●文人ルキアノスが活躍   | ●ネロ帝がオリンピック競技大祭に参加 [A.D.67]                                   | ●オリンピック競技大祭再復興<br>●第211回大祭開催年が変更される [A.D.65]<br><br>●旅行家パウサニアスが「ギリシア案内記」の中でオリンピックの記事を書く [A.D.241]   |
| 100                  |                                  | ●コンスタンティヌス帝がキリスト教を公認する<br>●ニケア公会議   |   |   |
| 200                  |                                  | ●テオドシウス1世が異教を禁止する<br>●ローマ帝国が統一される<br>●テオドシウス2世により異教神殿の破壊令が発せられる   | ●神域の破壊がはじまる   |   |

主な参考文献 『ドイツ学術隊発掘調査報告』『オリンピックの記念建造物』、アルフレッド・マルウイット『オリンピック』、その建築、パウサニアス『ギリシア記』(飯尾都人訳)『龍溪書舎』、ウイトルム・パウサニアス『建築書』(森田慶一訳)『東海大学出版会』、J・J・クルトン『古代ギリシアの建築家』(伊藤重剛訳)中央公論美術出版、R・E・ウ

イチャリー『古代ギリシアの都市構成』(小林文次訳)相模書房、フエレンス・マゴジン『古代オリンピックの歴史』(大島謙吉訳)ベイスポール・マガジン社、村川堅太郎『オリンピック』中央公論社、ニコラオス・ヤルリウス他『古代オリンピック』その競技と文化(成田十次郎他訳)講談社、鈴木良徳『続オリンピック外史』ベイスポ

ール・マガジン社、堀内清治『地中海古代都市の研究』(16)『オリンピック』、ゼウス神殿の基準手法と柱割り』及び『26』オリンピック、ゼウス神殿のオーダー比例について日本建築学会九州支部研究報告、伊藤重剛『オリンピックのゼウス神殿の建物配置に関する試論』日本建築学会大会学術講演集、その他。

訪れ、美しい少年たちと会話を楽しんだ。やがてそこで哲学教育も行なわれるようになり、アテネにはプラトンやアリストテレスが講義を行なった有名なギムナシオンがあったほどである。

パラストラとギムナシオンの区別は、都市や時代によって明確になっていない場合もあるが、オリンピックではパラストラがレスリングやボクシングなどの格闘技の練習場、ギムナシオンはそれ以外の競技の練習場であったとされている。オリンピック祭に参加する選手たちは、その一か月前からこうした施設において練習に励むことが義務付けられていた。

オリンピックにおけるパラストラとギムナシオンは、クラテオス川の近くに建設されていた。それは選手たちが練習後に汗を流すための浴場用に大量の水を必要としたからだが、ギムナシオンはのちに川の氾濫によって、その大半が流出してしまった。

◎ヒッポドゥロモス(競馬場)

オリンピック祭の創始者といわれるペロプスの伝説にもみられるように、戦車競技はギリシアでは早くから人気の高い種目であった。この戦車競技や騎馬競技が行なわれたヒッポドゥロモスは、オリンピックでは紀元前七世紀に建設された。その敷地は、神域の南東を流れるアルフェイオス川の土手や河原付近といわれるが、度重なる洪水によって流出してしまい、現在も正確なことは分かっていない。

へ作業を終えて

オリンピックの歴史はあまりにも長く、その文化的な意味はあまりにも深い。ギリシア文明の有していた魅力的な要素の多くを、この一地域にみる事ができるのである。建築についてだけ考えても、ギリシア人が建築に託した究極的な美の概念、神域と競技施設との不可思議な出会い、あるいはメタボリズム

古代オリンピック大会種目 平凡社「世界大百科辞典」より

| 競技種目         | はじめて行われたオリンピックアード | 年          | 備考                             |
|--------------|-------------------|------------|--------------------------------|
| 1 短距離競走      | 1                 | (B.C.) 776 | 第175回(B.C.80)をのぞき毎回行われたと考えられる  |
| 2 中距離競走      | 14                | 724        |                                |
| 3 長距離競走      | 15                | 720        |                                |
| 4 古代五種競技     | 18                | 708        |                                |
| 5 レスリング      | 18                | 708        |                                |
| 6 拳闘         | 23                | 688        |                                |
| 7 四頭立戦車競走    | 25                | 680        |                                |
| 8 競馬競走       | 33                | 648        |                                |
| 9 バンクラシオン    | 33                | 648        |                                |
| 10 少年短距離競走   | 37                | 632        |                                |
| 11 少年レスリング   | 37                | 632        | 1回きり                           |
| 12 少年古代五種競技  | 38                | 628        |                                |
| 13 少年拳闘      | 41                | 616        |                                |
| 14 武装競走      | 65                | 520        |                                |
| 15 二頭立ラバ戦車競走 | 70                | 500        |                                |
| 16 雌ウマ戦車競走   | 71<br>84          | 496<br>444 | ラバ戦車競走と雌ウマ戦車競走中止               |
| 17 二頭立戦車競走   | 93                | 408        |                                |
| 18 ラッパ手競走    | 96                | 396        |                                |
| 19 伝令競走      | 96                | 396        |                                |
| 20 駿馬四頭立戦車競走 | 99                | 384        |                                |
| 21 駿馬二頭立戦車競走 | 129               | 264        |                                |
| 22 駿馬競走      | 131               | 256        |                                |
| 23 少年バンクラシオン | 145<br>178        | 200<br>68  | 競馬を廃止する                        |
|              | 194               | 4          | 競馬を再び加える                       |
|              | 195               | (A.D.) 1   | 競馬を再び廃止する                      |
|              | 199               | 17         | 競馬を3たび加える                      |
| 24 駿馬十頭立戦車競走 | 211               | 67         | 1回きり                           |
| 25 音楽競技      | 211               | 67         | 1回きりと思われる                      |
| 26 悲劇上演      | 211               | 67         | 1回きりと思われる(ただし朗読は第84回に行われた)     |
|              |                   | 212        | 69 短距離競走に予選を行う                 |
|              |                   | 222        | 109 競馬を4たび加える(長い間中絶したものと記録される) |

注 (1) 主としてメゾーFranz Mezによる。(2) 一つの大会ですべての種目が行われたのではない。最盛期で13種目行われたのがいちばん多かったといわれる。

ム・シテイ(新陳代謝を続ける都市)としての面白さなど、興味は尽きない。

オリンピックは現在、石材の転がる遺跡に過ぎないが、かつてそこは人々が築き、祈り、憧れ、競い、楽しみ、熱狂した、ギリシア人の魂の原郷だったのである。その若々しい、文明の青春期ともいえる一瞬に、建築面から挑戦したのが今回の復元であった。復元にあたっては、何よりも現地での取材がわれわれに大きなインパクトを与えてくれた。アテネから車でほぼ一日。茶褐色の岩肌の続くギリシアの地にあつて、オリンピックの緑は一際美しい輝きをみせて、われわれを迎えてくれた。古代の人々は、この緑あふれる祝祭の地をめざし、幾日もの旅をいとわず全国各地からやって来たのである。オリンピックの祭典が、当時いかに大きなイベントであったのかを

物語っている。人里離れたオリンピックの地を歩き、見果てぬアミューズメント・パークへの想いを巡らせながら、われわれはふと呟いていた……この永遠の地を、われわれ建設会社の力で創建当時の姿に蘇らせることができたなら、どれほど素晴らしいだろうか。語るべきことはまだまだ多いが、日本にはあまり知られていないオリンピックの姿を、いくらかでも伝える機会となれば幸いである。

なお最後になったが、今回の復元にあたり東京大学の榊山絃一教授、青柳正規教授に多大のご協力を戴いた。また熊本大学の堀内清治名誉教授と伊藤重剛助教授には、随所で貴重なご助言を戴いた。さらに、今回の復元データはドイツ学術隊の発掘調査資料に拠るものであることをここに記し、あらためて御礼申し上げたい。